911.3
イ
下

文月
泊船ニ文月のトアリ誤リカ

初秋

[illegible]秋

一翁四搭集

惺庵西馬著

秋之部

直江津にて

文月や六日は常の夜には似ず　翁

ふみ月や燈籠を盛る飯屋の内　雲角

文月やひとりてねむき娘の子　〃

鳴海眺望

はつ秋や海も青田の一みどり　翁

初秋や畳みながらの蚊屋の夜着　〃

夕への内や一夜の中に秋は来ぬ　〃

秋日

残暑

新涼

西雲花故事ニ残暑をしとせり

冷

身ニ入

甲子紀行首途ノ吟なり

秋の日よりそめてのこる秋なり　去来

牛部屋に蚊の声くらき残暑哉　翁

　ある草庵にいざなはれて

秋すゞし手ごとにむけや瓜茄子　丶

ひや／＼と壁をふまへて昼寝哉　丶

　李下が妻の身まかりけるに

寐られずや肩へひえゆく北おろし　去来

　江上の破屋をいづるとて

野ざらしを心に風のしむ身哉　翁

身にしむや宵暁の舟じめり　其角

　父の煩しきを心もとなくて

居たるにいなふとのて[illegible]

稲妻

　まことらぬて法内を中出され

ふ新る色る禅より心よりいふを告

折り物箋の端より書し侍る

秋かぜにのきゝは身にしむ紫の風　丶

寄ス二李下一

いなづまを手にとる闇の紙燭哉　翁

宿ス二[illegible]ガ賀ニ一

あの雲は稲妻をまつたより哉　丶

或智識の何かのの禅大徳のゆに

みつこのやはうそのこよに

いなづまにさとらぬ人の貴さよ　丶

粟津にて

いなつまや湖の拙をはなちあめの穴　丶
本留まるゝ電に猿骨とゝの留
鼓をこのまへて餓ゑる不を畫て
群蛍の壁にこの年になりやまへ
て生前の気禁あゝハ此遊に
あゝあんやこの髑髏を枕と
して終に夢ともみてむの
さゞれ只其の生前を志あるを
なるかなり
いなつまや顔のところ／＼すゝきの穂　丶
稲妻や闇のかた行五位の声　丶
雲に起て後予の見る東

撥磨山賦アリ

悟らぬ人あり
稲つまや拙きにいふ給ふる　其角
いなつまやきのふは東けふは西　丶
海邊暁雲
稲妻や鞘懸(ヤケ)しかる雲の又　丶
雄水檀槙にて
稲妻に常しらぬ神子の問ごと哉　嵐雪
いなつまのこのまにむきて竹の蔀　去来
長崎丸山にて
稲つまやどの傾城とかりまくら　丶
夜毎まつ上りて泳雲すなり
啼る

花火

棚機
艸庵トモ野童亭トモ前書アリ

榾清すや椀明てのちも舟まち　史邦
いなづまのわきて落るや山の上　丶
小屋ぎし花火の篝のかげすゞし　其角
舟興
一番に花火あがるや舟のうち
何のしの代岸に浮んで四国　丶
へ越し人あり
たなばたやまちかね硯の水に祝　翁
棚機や秋きたりける夜　丶
あまのすゞや蓑笠縫ひ入てれ笛吹　其角
棚ばたや賀茂川わたる牛車　嵐雪
名月の秋ハ心のふしんそのうらに近

星待
たなトハ此辺ノ漁父ノ妻娘ノ事ナリト自註アリ

硯洗

星迹

たなばたや降らぬ契りに星合ぞ　丶
此家の黒崎ゆゑ明日ハ浅きの夜
ある沖に出て笛吹の踊し待ちる
やうて
棚機やよそ事ならぬ舟踊り　去来
黒崎が梢の宿り
うち付に晴し待るの浦の宿　丶
よし野西行庵
硯あらふ岩間の水の苔清水　翁
笹の葉つけつ梶の葉墨かりの人　其角
魯町にあづけし物を
此家の木のもとへ入るかし迹　去来

星合 延宝中吟なり

二星 九元ニ双林塔ニ作ル 借字なり

汲ありとあくるに海のむかし迄　丶

名和八詠のうち

那しふの中やたえなん銀田川　翁

星合や人のあふ瀬を[illegible]　其角

此数の[illegible]

深しあひや鵲橋の[illegible]　丶

星合や此星待し[illegible]　丶

那しあふや機女も[illegible]　嵐雪

星合に妹と[illegible]待女郎　丶

夜明まで角[illegible]中や二つ星　丈草

素堂の母七十あまり七とせの秋

七月七日[illegible]葉の

七夕[illegible]

祝ふ者七人[illegible]

七夕の[illegible]

七株の萩の千本や星の秋　翁

第ニ雨星ニ文ある男

高水に星も旅寝や岩の上　丶

名歌の木[illegible]星の影　丶

萬葉や大角豆は[illegible]　其角

出雲崎にて

荒海や佐渡に横たふ天の河　翁

大切の[illegible]の川　其角

[illegible]や天の河　丶

星秋 杉風家蔵七種奥物ニ萩の千本トアリ 百五十年来萩の手本ト誤リ来レリ

星合雑

銀河

鵲橋

生松原やかゝりのこたる銀河　嵐雪

梶の葉より小唄うたひて
舟やまぬひと夜より京での川、
大伽藍造営ましくある京の
今日まくそのこ借る小筋士
難波杣の居に反に山ひとつ出
来たるこのこ空の句ひ比ちのく
あるへきみそ取り市雪

星野より笹や付らんあまの川、
おもへ駒のかしらやての河　去来

雨後
このさとや石を重石(オモシ)の橋もあり　李角

池坊立花

橋となる橋となりしつきもの、
飛香丹波をの蹴鞠より市の
坊の立花みや志野田夫宗のめ
風流なる人るあり居を人るあり
林風の寺し得をのかく立花の　嵐雪

花みてのまゝに入葉ハありしか
花ひらき市にその勢をいふ
また出し物ある事ひとと

蓮賣

秋は夕は清き風や蓮売り　李角

燈籠

親首の横
夕のもや星桃灯は燈ともせ　蓮翁
市寓

迎鐘　七月九日六道参リ
前文アリ

魂祭　翁艸ニ題臥ニ...ト有トアリ

西側に燈籠ともすの光やこゝの角　其角

たまる人に迎りかねて辻〃ありり　ヽ

見女見男燈籠にまよはひれかな　ヽ

市井

うまさは杖の手門の燈籠かな　嵐雪

あるいはひらひらのこゝろ迎ひつゝ　ヽ

昔伽や折りかへかへし魂祭　翁

加賀の国をさるとて

無縁のゆのりや以つのたまつり　ヽ

秀部尚

いつまつりあかつき焼場のけふりかな　ヽ

尼寺は月のよりやうりさゆりて　ヽ

数ならぬ身となおもひそ魂まつり　ヽ

盆會

一つゝまほの外さまて魂のゆふへの風　其角

契のふ見し人や端の玉まつり　ヽ

たかのまつり門のうへの釈ともしん　ヽ

偲ぶのむかしは水そゝし魂まつり　嵐雪

魂棚は露やありしもあらぬ一の影　ヽ

玉祭り母(モ)衣の書戸の書き何　ヽ

たま棚やこれあまくさ茄子あへ　ヽ

いの字字

霊棚の栗をさんさんも字これ　ヽ

たま棚の奥なつかしや親の顔　去来

墓参

翁にわかれける人の許まで申て
森見のつくしやう紀錦ふ　ヽ
室堂の隣に竹や山のうへ　丈草
舊里に帰りて
聖霊ありしと名きゝて十余年　ヽ
たま棚や薪末をさゝる月の影　ヽ
聖霊も出て一夜の世話採る風　ヽ
聖霊の来ての後し人をあつめけり　ヽ
甲戌の秋大津にありしを兄の
もとの許より消息せられければ
舊里に帰りて盆会を営むとて
家はみな杖に白髪の墓参り　翁

茜屋半七美濃屋於三ナリ

あの縁や美濃や咲くたる不起
名の所の法としまる所は其子なる舞の
墓上の露ときえし事を自然
此世話あまりに舞集に選び
けるとて人もあはれに待りけり
我名嵐雪自照して名の詩紫に
彫入たりしあはれ聞て所々の縁
ふたりの名は縁を紙一の本も扣えた
待り申せとな
菊に菊ゆかる夕めの墓参り　嵐雪
年経て長崎に帰り侍るに
見し人は孫子となりて墓参り　去来

送り火

大文字火

妙法火

生身靈　松ヶ崎ニアリ

陌上塵

踊

送り火や宗家のまわり十文字　其角

おくり火の山のまはりや家の数　丈草

大文字の内をはなれぬ花火哉

のこりの出来るまでなり　嵐雪

山の端を雲のはなれや大文字

煙さへ焼火の後や秋の一つ　、

生身靈酒のはしぬ親ゝ仕への影　其角

海辺升酒

湖明り灘あつめや生身魂　、

一七屋鉄を打ちして踊つの化　、

伊勢の鬼ほろしき踊りの踊哉　、

小姫のおどりさ拍子　蕪踊　、

二百十日

相撲

さりとは明日は細の字ぬめのん　去来

嵐雪か四国に赴ける時

秋のちは二百十日の船　支考

角觝や奥の旅籠のさむしきより　翁

むかしさけ秩父殿さへ角力とり　、

許六か舞に

勝さまふ以ゝものすゝ味の色　、

上手なく石ゝ優美なりさまには　其角

よき衣のさゝふ蹄しや角力とり　、

投られて坊主なりけり辻角力　、

角力取ならぶや秋のからにしき　嵐雪

都でもおもしりき角力取　去来

扇置

露

松ニ草鞋ノ懸リタル画ノ讃ト云リ

丸岡の天龍寺を出る時北枝
の小松にわかれに出て
もの書て扇ひきさく名残かな　翁
芳野西行庵にて
露とく〳〵こゝろみに浮世すゝかはや　〃
画讃
西行の草鞋もかゝれ松の露　〃
曽良にわかるゝ
けふよりや書付けさん笠の露　〃
二見の浦
硯かとひろふやくぼき石の露　〃
一草庵の席に饗應を制して

駒取ハ童ノ戯レナリ

句集襟ヲ尻ニ誤ル

白露のさびしき味をわするゝな　〃
園女が新の寓居
ちる露は一升入のめくその姉　其角
草の葉を遊びありけよ露の玉　嵐雪
十家の書の分ありける時に
駒とりのぬれて行や来の露　〃
さし露や梢の外迄の韻あり　去来
翁の墓殊細道をむかしなりての
出家の押に書付ける
濡て千切槌や濡そりて袖の露　〃
露落て襟あけてゆき木一の汁哉　〃
惟然　同

朝夕やのこてふ手の袖の露　去来

嵐蘭追悼

子貢の剣をぬきんて事をしらず露ゝ
遊女常盤がまつの心を知る哉
若くておもひたるも人のなかにゐる
露をおりし袖のあかつけの紅ゝ
嵐蘭ハ常に嵐蘭の丈ハ仙の
地あるまのありゝ士峰地を払く
若くてたとさし人日月のためにまみ
をひくくかしくおもふ不皆春か
しくて美菓子実を待人より句を
交きます文人より志をおき

霧

箱根ノ関ヲ越玉フ時ノ吟ナリ

不二筆をさしてそゝしるさし
藐姑射の山の神人ありて書き
まくきんうち画をよくせんろ
雲霧の暫時百景を尽しけり　翁
霧時雨富士を見ぬ日ぞ面白き　ゝ

由井ヶ浜

沖霧や一の鳥居や浪の音　嵐蘭
朝きりや空飛夢をふじの峯　ゝ
宵寝夢や霧のまくしきる明海の　ゝ
宇治の山水
川霧や菜立ふしきの絵しきのえん　ゝ
冥讃

秋風

甲子紀行ニ前文アリ

又同上

秋風や白木の弓につるはらん　去来

鈴鹿山

馬の口よりしくるゝ霧の名ふのし

憐ニ(アハレム)捨子ヲ

猿を聞人捨子に秋の風いかに　翁

義朝の心に似たり秋のかぜ

秋風や藪も畠も不破の関

身にしみて大根からし秋の風

一笑追善

塚(ツカ)もうこけ我泣声ハ秋のかぜ

途中

あか〳〵と日ハつれなくも秋の風

花摘ニ秋の風トアリ

小文庫初あらし吹ケドトアリ

那谷寺ハ奇石さま〳〵に古松

植ならへて殊勝の土地なり

石山の石より白し秋の風

加賀の山中桃夭に名をつけて

桃の木の其葉ちらすな秋の風

伊勢の國宇治中村を過て

秋風や伊勢の墓原猶凄し

秋風の吹とも青し栗の毬

坐右の銘

人の短をいふ事なかれ己か長をとく事なかれ

物いへハ唇さむし秋のかぜ

残暑ノ吟ト蚊の声くらき
蚊のよはりト何レカ再案ニヤ
秋風ノ吟ニハ哥仙アリ

去来伊勢紀行の跋
西ひの一あつき日一秋の風　〃
　悼二松倉嵐蘭一
秋風に折れて悲しき桑の杖　〃
牛部屋に蚊の聲よはし秋の風　〃
　野水が旅行を送る
見送りのうしろや寂し秋の風　〃
秋風の吹ども青し栗の毬　嵐雪
淋しさの辻堂いくつあきのこの世　〃
　閑居
痩る身をさゝへる木に似たり秋の風　〃
縫り来の魚をゆするや秋鐘の声　〃

初嵐

秋風や白木の弓に絃はらん　去来
　吉備津宮奉納
秋の音や鬼さりし吉備の山　〃
あきの声おちて続く磯の海　〃
白川や屋根に石おく秋の色　〃
　雲津川
秋風より耳の垢とれわたし守　〃
　江の嶋
白波や海士の子らへや初あらし　嵐雪
七月廿一日五篇三回忌を営みて
幻住海法よしのにて墓銘
湖南義仲寺念佛堂

秋声

秋空　此元ニ杉ヲトアリ　炭俵杉子トアリ

秋雲

秋雨

秋山

三人の声ふかさへ[illegible]秋の声　其角

秋の声尾上の杉にはなれたり　〃

雲護院にて

櫻の木ゆるかさめるや秋の空　去来

旅枝亭にのびしに

乾兌坎震離艮坤巽（ソラヤアキミツユリハナスヤマオロシ）　其角

ゆきりあさき空きましらや秋の雲　丈草

伊賀へ出る討おくれ侍にて

いなづまのあまりの雲　〃

杉の葉をぬらしたる秋の雨　〃

幻住庵にて

旅寝や霧落る秋の山　翁

秋水

桐一葉　一ニきりしさを出て　とまぬるトアリ

秋山や駒もゆるがぬ鞍の上　其角

於横川洪崖水接天

根の浮木のうや秋の水　〃

秋の水淡路島根をこぼれけり　去来

来ものやわきしの秋の水　丈草

旅寝かよひぬあまの水　〃

嵐雪にわかるゝ

あかぬ[illegible]の別れしさ桐一葉　翁

嵐雪が別ハ旅雲にかゝり

夢に笑た鼓の[illegible]にかゝれしに

古笠

あしらぬ梅のひとつ葉や笠の声　其角

散柳

木槿　延宝ノ吟画賛ス

萩　甲子紀行ニ辰の辺トアリ素堂ガ序詞ニ辰ちかしトアリ又ミ初案狼も一夜は宿せトアリ萩のりしトアリ又芦の花ト笈日記ニ又ハイカニヤ

一葉ちりいくらかちりて有秋歟　嵐雪

柳陰軒にて

ちる柳あるしも我も鐘をきく　翁

全昌寺にて

庭掃て出ばや寺にちる柳　〃

花木槿はだか童のかざしかな　〃

ある人の許

道の辺の木槿は馬にくはれけり　〃

そき京や一夜は伏す山の犬　〃

ひとつ家に遊女も寝たり萩と月　〃

観水亭

ぬれて行人もをかしや雨の萩　〃

句撰ニ寺の露トアリ

ますほの小貝拾はんと種の

浜に舟を走らし法華寺に上りて

小萩ちれますほの小貝小盃　〃

浪の間や小貝にまじる萩の塵　〃

画讃

しら露もこぼさぬ萩のうねり哉　〃

萩堂玄梯子の庭なでしこの作りし

を見て

風色やしどろに植し庭の萩　〃

文ハ萩露集にあり略ス

萩の露擬貝り久しき此秋

毒海長老我草の戸にして身

其角

芒尾花

吉原日本堤

まくのり侍るを築りて

何ごとも招き果たるすゝきかな　翁

伊勢詣一の手松

蜘の囲やすゝきの中て小松原　其角

せ野むら野をわけて

角文字やいせの野飼の花すゝき　、

二見にて

岩の上に神風寒し花すゝき　、

在原寺にて

僧綱の志清のふむらふ芒の穂　、

二間茶屋

白馬の尾髪吹とる尾花の穂　、

遠里小野の秋にかへりて

霧雨も尾花にそよぐ野分かな　、

嵯峨の宮にやすみて

嵯峨中のさびしさくゞる芒かな　嵐雪

雲津川にて

花すゝき絶間の嵐を送りけり　、

品川へ二里の傍や花すゝき　起

尾橋てまねきまねくや尾花芒　去来

花すゝき瑞穂の露にまけにけり　、

日見んとふ山にて卯七に別る

ゆくさきにとて

君の手を放ちのこる穂なへし芒　、

女郎花　此句古集ニ所見ナシ案ハ本の書損カ
笈日記ニ出ケリ

蘭　泊船蘭ニ蘇鉄ト誤ル
甲子紀行ニ文アリ

玉川の水におぼれそ女郎花　翁

ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花　〃

瓢の銘

米のなき時ハ瓢に入れてたくハへし　〃

一夜菴栽て

淀城へハ何に入れておくへし　其角

敦賀にて芭蕉

門に入れば蘇鉄に蘭のにほひかな　翁

てふといへる女発句乞けるに

蘭の香や蝶の翅に薫物す　〃

芭蕉同律

蘭たる草や蝶の葉の下　嵐雪

朝顔　甲子紀行ニ文アリ泊船句撰ニ死のこりトアリ

草の戸に我ハ蓼くふ蛍かな　其角

当麻寺に詣て庭上の松を見

凡千とせも経たるなるへし

僧朝顔幾死かへる法の松　翁

和其角蓼蛍句

朝顔に我ハ飯くふ男かな　〃

嵐雪か画に讃のぞみければ

朝顔ハ下手のかくさへあはれなり　〃

人々郊外に送り出て三盃を

傾けはべるに

朝かほは酒盛しらぬさかりかな　〃

閉関

朝顔や昼は錠おろす門の垣　〃

土元ニ朝良荒野ニ菊の露トアリ

朝一の月や出て[illegible]我友なしと　翁

ある御方より[illegible]の[illegible]出さるゝ

扇に讃をもとめあり

朝顔や扇の[illegible]垣根かな　雲[illegible]

市中の閑居

[illegible]やよりしみん人は[illegible]　ヽ

[illegible]ある御[illegible]

朝顔は[illegible]のちこの[illegible]　ヽ

あさ顔[illegible]人や[illegible]帽子　ヽ

[illegible]の[illegible]や水の物　ヽ

[illegible]

秋海棠　イニ画賛トアリ

角觝草

草花　イニ[illegible]トアリ

花野　イニ富士に横たふトアリ

[illegible]の[illegible]への[illegible]　ヽ

病床に風を[illegible]の[illegible]あり

朝顔の[illegible]　嵐雪

あさ[illegible]や[illegible]の[illegible]　去来

秋海棠西瓜の色に咲にけり　翁

[illegible]角力[illegible]の花[illegible]　ヽ

高田医師細川[illegible]

菜園に[illegible]の[illegible]

草[illegible]の[illegible]　ヽ

[illegible]富士に[illegible]　嵐雪

[illegible]の秋[illegible]　ヽ

あ[illegible]　丈草

蜀黍

延宝六年吟

十二ツの穂トアリ

荻

芭蕉

天和初年ノ吟ナリ

酸漿

蜀黍や軒端の荻のとりちがへ　翁

荻の穂や頭をつかむ羅生門　〃

盃の三葉を切影にして一字を捺る　洗

激しきてもしてに出る荻の聲　嵐雪

草舎の賦

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉　翁

此寺は庭一盃のはせを哉　〃

画讃

鶏啼やその野に芭蕉破ぬへし　〃

鬼灯は実も葉もからも紅葉かな　〃

鬼灯のこゝろを見んとほうや蝶の声　其角

若煙草

瓢

曠野夏ノ部ニ出セハイカゝニヤ千鳥掛ニ初秋ノ羽圭アリ六七ノ集中或ハ夏トシ或秋トス

西瓜

里たつ娘らしさや若たはこ

鬼灯のきれは法ふも鍬この形　嵐雪

此ちは千寺山田の畔の夕日の紅　其角

悦るものりこの若やま誇る煙草の露　〃

初秋中の百姓ゆ遊ぶ者

瓢の影を消

夕かほや秋はいろいろの瓢かな　翁

綾から瓢る男の樫つゝ其ハ

花本のから乾し

西瓜とふ奴の難餅盆のはなり　其角

光のたちてありつゝる西瓜哉　嵐雪

虫なかり荷ふ物つく西瓜哉　去来

蜀黍　延宝六年吟

荻　十二节ノ穂トアリ

芭蕉　天和初年ノ吟ナリ

酸漿

蜀黍や軒端の荻のとりちがへ　翁

荻の穂や頭をつかむ羅生門　〃

盃の言葉を切り髭ぬいて一字を撰る　洗

濯しきてゐにぬる荻の聲　嵐雪

茅舎の感

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉　翁

此寺は庭一盃のばせを哉　〃

畫讃

鶏頭やその影に芭蕉破ぬべし　〃

鬼灯は実も葉もからも紅葉哉　〃

鬼灯のつらを見流しや娘の声　其角

若烟草

瓢

西瓜

曠野夏ノ部ニ出セリ　初秋ノ哥イカニヤ千鳥掛ニ初秋ノ詞書アリ六七ノ集中或ハ夏或ハ秋トス

里人の娘らしきあひさの若烟草

鬼灯のさびれは清ふ煙草の影　嵐雪

たばこ干す山田の畔の夕日の影　其角

咲る日なりと茶をのむ煙草の影　〃

初秋中の一日此處にて遊ひて

瓢の影を酌

夕顔や秋はいろいろの瓢かな　翁

髪をゆふ男の袴つまむ鷲は

みな声をつくる哉し

西瓜さへ奴の頭髪のさかやき　其角

先ひとつ食ふてからの西瓜哉　嵐雪

西瓜さへ遊ぶにも西瓜哉　去来

冬瓜

芋

故人に逢て
冬瓜やたかひにかはる顔の形　翁
惇ニ似風
手向けり芋は蓮に似たるとて　、
西行谷
芋あらふ女西行ならは歌よまん　、
嵐蘭一子弔慰をあそはせし也
芋の子やまた銭の杖をもちゐし哉　其角
芋をつゝむ竜の風呂敷の中より乳　、
ゆかしくの?に帰るに行く秋の末　、
宝川
芋あらふ人より先に垢離とらん　去来

蕃椒

あくさぬそ茶ハ茶汁ホトアル再案ナラン

早稲

類柑子ニ分入る道トハ誤リカ

浪の帷紋をりなしへいの子　丈草
蕃椒の芋をさめても帯にかけし　翁
大風のあしたも赤し唐からし　、
ま?てあをきもの色かはし
木曽塚の舊草に在て敲戸の
人をゆかしむ
芋の戸をたゝくや椋鳥に唐からし　、
加賀の国に入
早稲の香や分入右は有磯海　、
早稲の香や人にかゝへる山の道　去来
以の字出れぬ
以家かてゝ衣はちらふ人の早稲の飯　、

鳴子

案山子

虫

蓊

洒堂カ鼾ヲ閻王ヒテノ吟ナリ

猪の云云ハ再案ノヨミナリ

里[illegible]の[illegible]や庭に出されて庵の舟　支考

何[illegible]に[illegible]へんぐわん鳴子引　雪角

上試りかゝる子の縄や霧の中　支考

田家

ぬくまれていふかゝしの縄力　去来

秋風の下や案山子鈴の縄り　支考

[illegible]の[illegible]寄せえし虫の声　野坡

[illegible]芽生や[illegible]虫の声　去来

病床

打しの声鈴中に[illegible]寝床覚ん[illegible]　支考

床の[illegible]新に入やきりぎりす　野坡

猪の床にも入やきりぎりす

句撰机ハ誤リカ

白髪ぬく枕の下やきりぎりす

きりしきや針の手もとる蓑

加賀の小松といふ所太田の神社

に実盛が甲の錦の切あり遠

き昔の坐同く錦のきれあり遠

きるまのうまのあたりあはれ

なりおもひて

むざんやな甲の下のきりぎりす

[illegible]守や哀あはれのきりぎりす　嵐雪

鹿倉木香あしの酒を経て地獄

[illegible]よりといふまであり[illegible]

季の混化[illegible]の数[illegible]ぬり

竈馬

たゝかおとし
おの魂は餓鬼也けりたそがれいとゞ　ゝ
喰ひ人のこぼれやきりぎりす　丈草
うき草のある所へ掃よせいとゞ哉　ゝ
物の音にまぎれて淋しいとゞかな　ゝ
方燈の飛や株乃歩影もいとゞ　ゝ
蜜にまぎれて家の帰きいとゞかな　ゝ
鍋の入りのかまに飛し音や蓋　ゝ
きりぎりすの吟や出立の襷の下　ゝ
をどり子の帰り来ぬまの駒や蓋　ゝ
海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉　翁
夜遊山

鈴虫　松虫

鈴むしや松明先へ荷なはせて　其角
あとあとの松むしきこの声淋しさよ　ゝ
茶碗銘所望に
松虫のりんともいはず黒茶碗　嵐雪

蓑虫

聴閑ト前書アリ

草の扉に住わびて秋風のかなしげなる夕ぐれ友どちの方へいひつかはし侍る
蓑むしの音を聞に来よ草の庵　翁

芭蕉庵へ文のついでに申つかはす
何も音もなし稲うち喰て螽哉　嵐雪

螽

秋蟬

ぬけがらにならびて死る秋の蝉　丈草

蜻蛉

蜻蛉やとりつきかねし草の上　翁

鹿

句選声ヲ声トアリ　誤ル

鳴かぬ夕暮を見ぬ野ふして
鳴鹿やこゝろ静まる三日の月　其角

旅中
鳴鹿の来ては堀こる笠のうへ　丈艸

奈良にて
ぴいと啼尻声悲し夜の鹿　翁

木辻にて
門立の秋くハへる男しかの形　其角
小男鹿や恋しき声より比流　〃
萱の山言きく萩の声のうら形　〃
卧処の小萩かちて萩の角　去来
鹿の萩を椎の木の皆見付たり　〃

鶉

鴫

イニ鹿をきくトアリ

イニ鹿の声トアリ

梓萩や宿りみんする雲の紀　〃
秋あらしや宿に臥たる萩の声　〃

嵐雪にて
満湖の宿りたかや萩の声　〃
都山や五声はらく鹿を聞　〃
鳴きたる眠たしかけし萩の形　丈艸
小笠縁や町まちなか鹿の声　〃

四菴滞留
桐の木にうづら鳴なる塀の内　翁
鷹の目も今や暮ぬと鳴鶉　〃

田中の法蔵寺にて
刈跡や早稲かたかたの鴫の声　〃

鴫

浪花の鴫も遠よるゆふべかな　其角

鴫たつて秋しきりなる鴫哉　ヽ

刈あとや早稲かたかたの鴫の声　ヽ

鱸

[illegible]二段川を阿舟さして下り鱸

鱸の稚海[illegible]を[illegible]に逆水大切所

[illegible]

打櫂り鱸をさかり潮の色　ヽ

[illegible]

沙魚

雑

古今抄三州紙ニ小葱ノ吟残暑ナリトアリ浮薔七月コロ碧花ヲ開ク

[illegible]海のうつて渡る漁女や鶴　去来

はぜつるや水村山郭酒旗の風　嵐雪

なまくさし小なぎが上の鮠の腸　翁

小松[illegible]

八朔

暴風

延宝年ノ吟ナリ

イニ石ナト誤レリ

[illegible]小松[illegible]萩[illegible]　ヽ

[illegible]黄梁[illegible]

一家に遊女もねたり萩と月　其角

旅人の枕となれや[illegible]人の

[illegible]

[illegible]先の秋を[illegible]　去来

先[illegible]の浦[illegible]

八月や海のさゞなき[illegible]の[illegible]　ヽ

名[illegible]八朔の[illegible]

八朔や[illegible]の[illegible]立[illegible]　翁

猪もともに吹るゝ野分かな　ヽ

ふき飛す石は浅間の野分かな　ヽ

夜寒

乙磯海集にて秋を

鷺の巣や嘯ふらるゝ乙磯海　去来

曲翠亭新夜寒

煮麺の下たきたつる夜寒の哉　翁

病人に棒木に寝るよさむの哉　丈草

友ぎみの毎に離つのゝ秋夜寒哉　、

嵯峨見ハ寄ラ山庵ニ

暁の家々離れよさむの哉

とうし雅にて　、

砧

甲子紀行讀虚栗ニ
タせヤトアリ曠野ニ
ヤノ字ナシ

砧打て我にきかせよや坊が妻　翁

声澄て北斗にひゞくきぬた哉　、

猿ひきは猿の小袖を砧かの哉　、

三日月

此句ニ賊ノ一柄詰アレトモ真偽不審

嵐蘭八月廿七日没初七日ハ九月三日ナリ

近江路を通り侍る比日吉の辺にて

旅亭にとまりぬ夜の上のきぬたきかれて

剃すてる男となりぬ砧の夜の風

ある老者のもとにて

中の宿り森ぬ子我人に秋砧　先笑

その後の人て素牛にて

砧きゝのん孫六やきき志津庵　翠

新宅

才拙の萬を仕舞ハきぬたこの風　、

三日月や朝顔の夕べ蕾むらん　翁

三日月や地はおぼろなる蕎麦の露　、

嵐蘭初七日

箸記ニヨるとあるたぐひ
みゆトアリ

駒迎

待宵

名月
延宝年中吟

見しやその七日ハ墓の三日の月　ヽ

大智根成就院より帰るさに

何事の見たてにも似ず三かの月　ヽ

駒ひきの木曽やいづらん三日の月　去来

桟（カケハシ）や先おもひいづ駒迎　翁

一の戸や衣もやぶらず駒迎　去来

待宵や[illegible]二見へ[illegible]　其角

武蔵曲[illegible]先んじし故

ハ[illegible]を去る事[illegible]あり

名月の出るや五十一ヶ條　翁

雲をり〳〵名月の秋や[illegible]山　ヽ

敦賀旅泊

元禄四年十八月既望ナリイニ瀬田
の橋ニ作ルハ非カ
萩の露ニ残暑ト前書アリ

小文庫ニさし込トアリ

名月や北国日和定なき　ヽ

名月はふたつ過ても瀬田の月　ヽ

夏かけて名月あつき涼かな　ヽ

名月や海にむかへば七小町　ヽ

名月や児立ならぶ堂の椽　ヽ

名月や鶴脛高き遠干潟　ヽ

名月や[illegible]芋のこのけぶりし　ヽ

深川

名月や門にさしくる潮がしら　ヽ

伊賀山中にて二句

名月の花かと見えて綿ばたけ　ヽ

名月に麓の霧や田の曇り　ヽ

名月や池をめくりて松のかけ　ヽ

名月や座頭の中の恵ひとつ　ヽ

等栽ゟ君あひて

名月の見所問ん旅寝せん　ヽ

三日糧をつゝむもふり

名月や十歩り鍬を振り帰り　雪角

鐘蔵船

名月や御堂の鼓一つ嘯　ヽ

名月やあり住吉の浮く松嶋　ヽ

名月や雲のうへより松の影　ヽ

名月や竹を空むる軒さきの　ヽ

名月やすゝきよすり袖の端　ヽ

名月や出しは芋に捨り出口　ヽ　嵐雪

名月やたし一の手わさる鋳の音　ヽ

名月や常ふり返り水のへ　ヽ

名月に絶ゆる滝のひかりかな　ヽ

名月や名心の名の抄に絶き　ヽ

名月の茶店は男一の郷　ヽ

鎌倉大仏

名月に甫をひかり御吹珠　ヽ

名月や柳の枝を南へふく　ヽ

名月や影しん二葉のあきらかき　ヽ

詞書略

古寺名月の雲をやきあり　ヽ

出崎より田上に旅寐をなし

帯り附

名月やたのしみきはまる旅寐哉　志来

名月や極らりまさる泰の声　丶

名月やむさしのふの樹屋照されけり　丶

名月や海山越えて宮見哉　丈芳

名月や車起して立寄屋　丶

名月や雨ありて風なかりけり　丶

荊口に蕗し発しに

名月の芽へゆかしきや旅まくら　丶

清涼紫震のあるなに清ありこの

頃くるる中なり

新月

今日月

新月や内侍所の椽　勢州　生角

新月やいはぬをむかしの男山　丶

義仲寺にて

三井寺の門たたかばやけふの月　菊

木を伐てひろく見ゆるやけふの月　丶

琵琶行をよむ

十五々の酒のさめてけふの月　之角

木のくもりての〻

烏帽子屋ハ息やし若て見るもけふの月　丶

新宅吟

汐汲をこのて見るやけふの月　丶

萩の露ニ文アリ

詞書略

信濃にも老子多ありけふの月　、
鯛は花を江戸に生れてけふの月　、
川筋の宴庵はいつもけふの月　、
音秀亭
富士より入日をうけてやけふの月　、
本坊寺より路の名ありけふの月　、
書塔の此く(ギャウ)修つゝけふの月　嵐雪
書きし新鑑にあらぬ此ころの月　、
仕舞ふ畑の松の形けふの月　、
書て見り松を書たりけふの月　、
ひとつの種のまくその鮭松江の
鱸鱠かへらぬ座に畑を咲し

十五夜

月今宵

月見

遠き浦の塩物たの紅江の其影し
夜の雨かれて名に立ちもの名月哉
秋の別もあまたかりしの名月哉
然けりし桑
鉄くもりして見えぬけふの月　、
髪向して窓をあけてけふの月　む学
十五夜の月のひときや窓をうし候　玄木
是して
月のあるとき家里人の葉うたん　、
田家
蛙の子や松にりつつの夢を月をみる　菊

初蟬ニ名月やトアリ

浅水の橋をわたる俗にあさうつと
いふ清少納言の橋ハと有一条あさ
むつのと書る所なり

あさむつや月見の旅の明はなれ　ヽ
月見せよ玉江の蘆をからぬ先　ヽ

古寺翫月

月見する座にうつくしき顔もなし　ヽ
雲折々人を休むる月見かな　ヽ
宵闇のとき人み見上て月見草　ヽ

鹿島根本寺

寺に寝てまこと顔なる月見かな　ヽ
娘みる九き梢かゝ月見この秋　其角

湖舟の繪有

押ならのりあけかしハ誰有見船　凡
言葉ひ月見なる人ふみさゝ常なり　嵐雪
諱ほにふるよりきゝぬ月見かな　ヽ
盲より唖のこのみき月見かな　去来
月見せん伏見の城の捨郭　ヽ
置いたりし帋もむ旅の月見かな　ヽ
笠着てもよくはてかしるこゝろ　ヽ
家晴とりかへりこのこゝろとも
この川や月見のなかれ嵐り　ヽ
葉ふれのこゝろなきも月見哉　ヽ
淀川の遠みて

十六夜　壬生山家ニ信濃の國坂木ニて前書アリ

月　鄙懐紙蕳塞ニ取ヒケ
闇のトアリ

舟引の道かたよけて月見かな　荷兮

いさよひもまだ更科の郡かな　翁

打出の濱にて

十六夜や海老煎るほどの宵の闇　〃

堅田十六夜

鎖あけて月さし入よ浮御堂　〃

やすやすと出ていさよふ月の雲　〃

十六夜はわづかに闇の初かな　〃

十六夜やたしかに暮るゝ空の色　去来

正秀亭初會

月代や膝に手を置宵の宿　翁

川舟やよい茶よい酒よい月夜

雑談集ニ前文アリ

古物語の古実を讀て

月やその鉢の木の日の下面　〃

菰島にて

月まちや梢は雨をもちながら　〃

田家

芋の葉や月待里の焼ばたけ　〃

月のゆりし小海振ぬんて

きのつきものなり

あの中に蒔絵書たし宿の月　〃

旅窓七夜

九たび起ても月の七つかな　〃

柱は杉風枳風が情を割給ひ

風俗文選ニ東順カ傳アリ

芭蕉翁水の物書きして絵探名
月のよき頃山の中芭蕉を植ゑ
栽けり
芭蕉葉を柱にかけん庵の月 、
深川の末五本松といふ所なり
船をさして
川上とこの川下や月の友 、
東順老人ハ深川に住せて東
雖小路をとも枕とし
の月のあるハ松の四隅の形に
見るこの春や出る涼舩の宵月夜 、
篭出庵にて

笈日記ニきのふからちよつ
ちよつと秋も時雨哉トアリ
此句ノ初案ナリ

今宵誰よし野の月も十六里 、
雖止亭月下送児
月すむや狐怖がる児の供 、
於柳亭にて
秋もはやはらつく雨に月の形 、
米くるゝ友を今宵の月の客 、
姨捨山にて
俤や姨ひとり泣月の友 、
善光寺
月かげや四門四宗も只ひとつ 、
湖の庵
月に名をつゝみかねてやいもの神 、

燧山

翁

義仲の寝覚の山か月悲し

元禄二年つるかの湊に月を
見て気比の明神に詣遊行上
人の古例をきく

月清し遊行のもてる砂の上

敦賀の湊

月のみか雨に相撲もなかりけり

仲林の萩敦賀にとゞまりぬありし
の物語り法海に鐘の沈みて
侍るを国の守海士を入て尋
させ給へと龍頭下さまに落て引

延宝年中ノ吟ナリ

あまつへきすの寺にして

月いつこ鐘ハ沈める海の底

なてのむるや江戸ゆハまれなる山の月

廿日余りの月のかすかに見えて
山の根きハいとくらきに馬上に
鞭をたれて数里いまた鶏鳴
なほ杜牧か早行の残夢小
夜の中山に到りてたちまち驚
ろく

うまに寝て残夢月遠し茶の烟

斜嶺か亭

戸をひらけハ西に山あり伊吹と

小文庫ニ月さびてトアルハ書損カ

句撰羽黒ヘニ作ル

ゝ花にもよし雪にもよし人
只に乾坤の治あり
その中より月もながめし伊賀山　ゝ

伊勢国又玄が宅にとゞめられ侍
る比、其妻男の心にひとしく物
ごとまめやかに見えければ、旅の心
を安くし侍りぬ。かの日向守の
妻、髪を切て席をまうけられし
心ばせ、今更申出て

月さびよ明智が妻の咄しせん　ゝ

悼遠流天窓法印

其魂を羽黒にかへせ法の月　ゝ

山里し心の底や水の月　ゝ

消息

水あふるなくて寂る秋や虫の月　ゝ

紫の庵とやらいふは山中きし名所ながら
世に知られず、秋の夜のあはれなる
時は東山より経奉る鐘を聞
て西行のよみたる跡ひとつなり
山家集にのせられたりける経
を見やと先ん宗坊のなつかしの名残
紫の戸乃月やそのまゝ阿弥陀坊
いきてら取る西行振立て家の前
より一萩をあつめし時への巻名より

孤松ニ明石ヤトアリ

跡さきし出て

明石の夜二十七夜も三日の月、

神路山

三十日月なし千年の杉を抱嵐、

祈思

星よ影も心清くしや十四日　秀角

長柄の座の記

有月もむかしの橋乃柱月かな、

唐才の庭袖ふくし月の雲、

雲井ふ一声雁の絶けり

傘持ハ雨ふ濡けり其のて也、

巴江

聲この聲く猪の音や峰の月、

維摩の像

山の端を大窓有り床の内、

蕉深

窓よりも東を見るや夢の月、

布袋

男も蛇も水の月とや眠り哉、

寺の月蒲菊脇ハ篭ふもりし、

池わを七夕にあり宵の月、

月出て雲踏ことをり小舟かれ、

懸杭の跡まで喜き月夜哉、

一茶酒白

名月の月に出かけり海のこの汁　〻
うちよせし小宿の小貝ら磯の月　嵐雪
長崎にありて
浦人を寐させて波のよる月夜かな　去来
長崎諏訪の社にて
尊さを京でかたるも諏訪の月　〻
我子を送葬して
かゝる夜の月も見にけり野辺送　〻
白和見る言ふにものうし月の暮　〻
岩はなやこゝにもひとり月の客　〻
誰しかも京ならん月のしき　〻
独の寐に行のるや惜しの月　〻

秋暮

京筑紫去年の月とふ僧仲間　支考
かゝる橋さへぬるゝ雨の月　〻
辻堂に案内させて出る月夜かな　〻
戸を明て月の影しや芝の上　〻
野山にも清のそらの月の露　〻
六助六兵衛の二人にまかせ鉄庵を
訪ふて故人の安否を問ふ
いく里帰つきりや秋のくれ　蘭
むかし聞し時ハ聞きるしを
おもひ出て桐出帯せハ
死もせぬ旅寝の果よ秋の暮　〻
棹郎(セントウ)の尻蹴りし秋のくれ　〻

延宝九ノ東日記ニとまりたるやトアリ又とまりけりやトモアリ再ゝ案ノ上廣瑒ニ出シ玉フニヤ

笈日記ニ人声や此道かへるト二句有衆儀此道やト定るトアリ

かれ枝に烏のとまりけり秋の暮 、

雲竹自画讃

こちらむけ我もさびしき秋のくれ 、

所思

此道や行人なしに秋の暮 、

何その姿あまうか巾 桂 、

青海や羽白黒みて秋の暮 其角

悼ニ工為

去人の跡さへなし秋のくれ 、

屋鋪のうしろ見る心秋の暮 、

舟巾

あふ山の富士見えかくるゝや秋のくれ 、

新酒

旅思

末寛のひとり見るや秋のくれ 、

秋の空石山寺の鐘の声は 嵐雪

寛然

舟橋ゟ笠屋の秋能やとへ哉 、

さくらのしろき顔くはへ秋の暮 、

立出てうしろあゆみや秋の暮 、

森ゟ都へ森へ見ゆる秋の暮 、

ゟ都人きゝのゝゝきゝ見ん秋の暮 去来

立遠春納

早稲酒や稲葉にむかひ晩にも 其角

野店ニ偶猿

稲

是あふる寺もの四八新酒かな　、

我らしき新酒ハ人の醒やすき　嵐雪

人は来ずさそひて

世の中ハ稲かるころか草の庵　翁

穂に出る世の中ハ田も晴やらし　嵐雪

稲出して穀をふる葉の中　其角

いはしろの稲を干まや大井川　、

落穂

落穂ひろふ落穂ひろへん実の家　翁

田家

庵主の卵らふらし落穂拾ふ　其角

初茸

句撰ニ走りうらうさへぬトアリイカニヤ

初茸やまだ日数へぬ林の露　翁

松茸

松茸やかぶれた程ハ松の形　、

松茸やしらぬ木の葉のへばり付　、

松茸や人にとらるゝ鼻の先　去来

椎ある茸ちしめちさぶ松茸　嵐雪

榎茸

付ト文字ニテアリつくト読ハワロシ

茸狩

茸狩やあぶなきことに夕しぐれ　翁

女中の茸狩

茸狩や鼻の先なる歌がるた　其角

松陰の庵りきのこの玉を取り流して蘭松茸…

…中尽

初茸あり

行くしれ数の玉や木の子より　、

木犀

木犀の昼ハさめたる香炉かな　嵐雪

初紅葉

紅葉且散

芙蓉　後走ニ日毎トアリ　芙蓉白画賛ト云リ

雞頭

山ふかく出かゝるや初紅葉　其角

うつりては清滝小袖を紅葉の乱　丶

遊女の画讃

枝ぶりの日ごとに替る芙蓉哉　翁

霧雨の空を芙蓉の天気哉　丶

鶏頭や雁の来る時猶あかし　丶

雁来紅（カマツカ）や投入ふかきの清水寺　其角

よるの雨の出るほどしるや紫鶏頭　嵐雪

鶏頭は海士か赤裸の畑かな　丶

鶏頭の昼ハうちくやぬり枕　止字

帝いくつ小宮て見るや笠の蝿　丶

後醍醐帝の陵をおがみて

御廟年経て忍ぶは何をしのぶ草　翁

蔦

蔦

韻塞ニ蔦紅葉トアリイカヽニヤ

葛

葛花

或人の草舎を訪て

蔦植て竹四五本のあらし哉　丶

吹音の雪の庵に蔦も其のりの紫　丶

桟（カケハシ）や命をからむ蔦かつら　丶

蔦の葉は昔めきたる紅葉哉　丶

峯のつゞき岩に定りて岩うつ蔦　其角

さる所にありて

蔦の葉や清きの方に苔の付　丶

葛の葉の表見せけり今朝の霜　嵐雪

黄油くむ小屋のきのひや葛の花　其角

花も見しき風雅のやさしの葛中ま　丶

藍花

千束へ四ツ塚のあたりへ行て[illegible]

畠原の水も深むや藍を植付　素堂

芦

難波津にて

芦の穂を折らしつ見てや芦の種　去来

あしの穂や顔をして上る夕月夜　丈草

藥堀

なき人の何をしる藥堀

むら雨に脊中に負て柴胡堀　翁

川芎の香に吹るゝや水の水　其角

綿

千里か旧里にて

わた弓や琵琶に慰む竹の奥　翁

木綿とる畠雲たちめ生駒山　其角

おもふ事なき身の[illegible]新毛を加へた

粟

泊船句撰脊戸の秋ト誤ル

よき家や雀よろこぶ背戸の粟　翁

粟之説

両枝を繋つる粟の粟とは　去来

蕎麦花

三日月日記ニ三日月やト有句撰三日月のニ誤ル

伊勢の外宮に詣て山家を待出て

そばはまだ花でもてなす山路かな　翁

三日月に地はおぼろなり蕎麦の花　〃

いせ原

横雲や木曽越ての蕎麦はたけ　其角

圓坊にて

淡山の蕎麦白妙や鏡山　去来

鴈

堅田にて

病鴈の夜寒に落て旅寝かな　翁

一しほの雲にあまえん三津の雁　其角

霧はれて来る人の
めづらしきかな

落葉々に散るや天津雁　〃

酒のみにおりて白秋の雁ひくし　〃

品川近翁

雁の後見送る空や海の上　〃

南天の実をためしや雁の聲　〃

雁の子の梢に高く付根哉　去来

鶯へ立道の姿かな

招けども寄らぬ空や三津の雁　丈草

尾州津島寺にて

帰雁

稲雀

渡鳥

句集春ノ部ニ入ル　イカニヤ

蕪の清寺の清水をかへりけり　其角

去年の帰りさえあり湖の雨　嵐雪

旅込むも[illegible]乞食の[illegible]　去来

稲すゞめ茶の木畠や逃どころ　芭蕉

同じ日の入るや雲やすゞしの渡り鳥　ト

秋あらし立雲の[illegible]わたり鳥　去来

去月の古翁芭蕉より上ける
芭蕉庵の広島を[illegible]常に
人々とへ[illegible]
いさぎよき[illegible]暁
一秋の窓に童とめ待る

常に聖く来て　いそのしわたり鳥　〃

橿鳥　啄木　山雀　四十雀　鮭

浦かせや通しに来るわたり鳥　丶
　長崎にて旅寝の比
あの雨今宵ハ旅寝や渡り鳥　丶
啼き飛や渡りゆくる雲の影　也学
　林叢下山
かし鳥り枝よりちるや紅葉かな　壺角
木啄の入りし帰る藁の松　嵐雪
山雀の戸にも寒さあるかしハ　壺角
老の名のありともしらで四十雀　翁
　小鳥寄長唄
四十雀小雀の中の五十から　壺角
鮭ゐるのこの中思ん實の見えし毎　翁

澁鮎　鮔　秋夜　長夜　後月

水音に鮎さひゆくや里の家　嵐雪
　山中十景高瀬漁火
いさり火に河鹿や浪の下むせび　翁
　車庸亭
晴きりの秋をとゝ鳥鳴しきる此の風　丶
秋の夜の長さをさげハとはる出の山　也学
長き夜は旅ならぬ身に寝しきなり　去来
　仲秋の月ハ更科の里姨捨山
月慰めの山で行あまた歎きの国
扣も勝ち其の後も同月十三夜に於て
木曽の痩もまだなをらぬに後の月　翁
石山に結びける

升市

露時雨

秋霜

桔梗の花のふハ角の名残りのかけ　ゝ

露おもつ木立の雫し後の月　呑角

遠からず手をかへしや店の月　ゝ

海山を見えて後の月見しの所　去来

住よしの市に立て

升買て分別かはる月見哉　翁

詞書略

袖ぬれて霊やまぼろし露時雨　嵐雪

母の白髪を拝みて

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜　翁

乙州が秩山にて帰る小貝ハ翁

の旅立をことふてかしこに

落水

菊

延宝年中ノ吟ナリ

笈日記ニ画賛トアリ

亮の眼りさめて山田や秋の落し水　支考

倶利伽羅や三度起ても落し水　翁

重陽

菊の香や葉や　梅未画　翁

秋を経て蝶もなめるや菊の露　ゝ

蓮池の主翁ゟ菊を送られ

のふハ龍山の宗匠をひらき

此酒の余れる紙をあめて

たハむれしまゝに

雑の根の……事なり

いさよひのいつまでかゝる菊の葉　ゝ

辛酉ト誤リ来レリ癸酉
ナリ依テ改ム

元禄癸酉初冬九日素堂菊園
之遊
重陽の宴を神無月のけふにまうけ
侍る事は其比は花いまだめぐみもや
らず菊花開時即重陽といへる
心により且展重陽のためしなきにしも
あらずとて猶秋菊を詠じ
人々をすゝめらるゝ事になりぬ
菊の香や庭に切れたる履の底　、
堅田の何がし木沢醫師の兄弟
亭に招かれしに二つの菊を植
て酒をすゝめてなぐさめける　此菜ハ

イニ琢和其トアリ
前輩ノ初案ニヤ

琢の中菊花の輪に劣し　不自ハ
蝶も来て酢を吸ふ菊の鱠かな　、
菜花讃
折ふしハ酢になる菊のさかなかな　、
九月九日乞食に一樽を携へり
其後ハ
草の戸や日暮れてくれし菊の酒　、
見んふのあるや[illegible]の菊　、
淡水亭にて
影待や菊の香のする豆腐串　、
八町堀にて
菊の花咲くや石屋の石の間　、

泊船ニ奈良ハ幾代の男ぶりトアレド此吟ノ初案ナラン

大門通りすぐるとて
翠簾や古きの店の背戸の菜、
田家にて
稲こきの姥もめでたし菊の花、
奈良にて
菊の香や奈良には古き佛達、
くらがり峠にて
菊の香にくらがりのぼる節句哉、
生玉辺より日をくらして
菊に出て奈良と難波は宵月夜、
右柳亭にて
はやくさけ九日もちかし宿の菊、

山中集先手後手集ニ折らじニ作ル

草庵の雨
起あがる菊ほのかなり水のあと、
北海の磯づたひして加賀の山中の
温泉に浴す里人の曰此所は扶桑
三の湯の其一なりとてまことに浴
する事しばしばなれば皮肉うるほひ
ひ筋骨に通りて心神ゆるく偏
に顔色をとゞむるこゝちす彼の
桃源も舟をうしなひ慈童が
菊の枝折もしらず
山中やきくはたおらぬ湯の匂ひ、
未因亭

隠家や月と菊とに田三反　、

如行亭

痩ながらわりなき菊の莟かな　、

きくの露落て拾へばぬかごかな　、

園女亭にて

白菊の目に立て見る塵もなし　、

蝶の下紫清く帯り菊の葉　雪角

柚の色や起あかりたる菊の露　、

菊の酒葡萄のこのしに志たくもあり　、

菊守は段出き花に老くやこのまゝに

出窓のそきは見んとやかなみの菊　、

起くの露や飛よりありあるあみにまて　、

菊九章

菊花

菊を切るあとまはらにもなかりけり　、

百重し地より遠ふ菊を咲かせん　、

其一　九日

菊の香にくらかり登る九日の形　嵐雪

其二　素堂亭

隠家やよめ菜の中に残る菊　、

其三　石菊摘へ出る所に

黄菊白菊其外の名はなくもかな　、

其四　名所

白きくの額眉や住せる扇に花　、

其五

葛の花茶のこやひやの始るまで
影の香の移りあとし恥くまで
りんて句をおもふく
錦の影ゝ茶も九人の形のあとの吟　ヽ

其六　琴

要あるてゐる茶葉ハうあつく離る吟　ヽ

其七　碁

茶器ふハおさ着るまけし人あらん　ヽ

其八　書　二十九

生まれ抽芭蕉を移ふ書茶の跡　ヽ

其九　画

茶偲り驟まで遊べ絵の具ヘ四　ヽ

絵の茶ふと釉ハ絹縁ある小蝶ゥ吟　ヽ
蜂ハこし蝶まで移ろや茶の花　ヽ
淑六帝指ふ燕支
茶ふの香りさまゝ山路の雲路哉　ヽ
初茶や類白の類の志ろきまで　ヽ
指入る風まや案しらふの茶　ヽ
一ゝ移りまとめる水ふまう茶の水　ヽ
落候りのうきたえなり茶の宿　ヽ
茶候ふ本ふの香茶ふ鮭の魚　ヽ
山路みるまでや散くり　梅茸　ヽ
斜め香ね鳴の夜覚えぬきくの音　ヽ
来よりかゝり喚へ指るらく志の乳　ヽ

山桃にまじる杏あり

志賀越しもあらし穂や菜の花　一

紅葉蜻蛉多かな

菊の香やしるしの庵や寝ても覚ても　玄木

園女亭にて老師のまねる

中に出る一つ有り

秋は先明る菊の蕾の形　一

程嫁ぬる

卅切の菊かも見へ菊の花　丈草

僧の手も庵の僧や人の菊　一

宝川の入り（沼流）を見て

空菊何の壁の菊の花　李角

野菊

菊紅葉

紅葉

蒼穹坂

菊紅葉の間に暮る

水清きにも菊の花菊紅葉　一

宮根

杉の上より見へ来る村紅葉　一

大山

猿押やるる宮根の下

三条橋上

片綻ぶ紅葉のこなた紅葉の水　一

何人の路

山形　一

梅紅葉

花終りし紅葉そめしありさまの山ゝ
戸城山荘
むら紅紫荘の窓まどたく白き所ゝ
柞林
外よりは楽しきのくまに紅葉ち　嵐雪
標茅（シメヂ）が原
林より煙焼たる日をかりあめのあとゝ
荘子標木の大きなる牛ほどのくまに
紅葉の様を見んと一ゆくくの宿
比されぬかんと敍藝道遙の友を
むかし事あり
ちりゆく二度の情や桜紅葉ゝ

柞紅葉

櫻紅葉

赤枯

南天実

栗

芽立より二度まで茂る梢の様
ここに学ぶ中にもれしわれらの出語
山や思はん所の落樹燃るかう
ちらぬのみよし
散りたる樹の紅葉も寂しき頃の紅　去来
思ひの外に桜の色もとむる所　支考
うら枯や草の錦ふきほ山　路角
南天や秋をこのむる小倉山ゝ
此是栗の思ふさを
二子山二子ひろさん栗のこゝろゝ
深谷向ひ松たてゝ
生栗を手に取りつめたる山路の所ゝ

柹

錸かゝり袖あきゝ祖の姫かな　ゝ

錸栗やかゝりきらけたる法の端　嵐雪

幻住庵ありて李由去来の
ふかりかり

蒟蒻と柹とうたふ草の庵　翁

於堂翠亭

里ふりて柹の木もたぬ家もなし　ゝ

嵯峨遊吟

渋柹や渋柹きらは我ながら　雲角

大和路の女あり物いひて

油濃女あり柹の渋さも志のびかり　ゝ

ひとり旅渋柹くふて顔ながき　嵐雪

洞巷暁

猿若り渋柹にぬる箱の姫　ゝ

落柹舎戯作

柹ぬしや梢ちかきの嵐山　去来

柹ふりやむかしぬれたる其集売　ゝ

去集に丁寧にて遠くの
手をかり寄せて

息才の嵐り山きん嵯峨の柹　ゝ

木の葉より色付かけ木綿かし　ゝ

釣柹や障子にうつる夕日の汁　史邦

落柹を喜ぶせるまつ

渋柹ハこのみの如くさよ明ほ哉　ゝ

木實

泊船句撰ニあしヒニ誤ル

木傳ふに宮熱出る熱柿のかな　、、

悠水別荘

籠り居て木の實草の實拾はゞや　翁

椋の實ちる椋鳥の羽音や朝あらし　、、

木の實の橡ふりきゝ世の人の出生るかな　、、

櫻や伊勢の白子寺さかし　、、

窪田雲漢の休宿

祖父ゝ親その子孫栄や柿みかん　、、

杖のさき井手の蛙のかはるらん

舟行のふたかゝり出羽稲たるゝきる

ふる人丸の柿の實山の恵の家

のこる木の實をのこらずありける

蕎麥

神田祭

笑ひ果して

榧のあらし喰の山鉢木の實　丕上　嵐雪

慈溪和尚小寓居

さはおや鶉あろうそり五たまき　其角

信濃催馬楽

宗来ちハ光猫ぎん信濃の蕎麥初花は　嵐雪

讀甲陽軍鑑

あら蕎麥の信濃の武士ハおろしや式　去来

雲頭の猫さへ多ある心たくつの風　史邦

神田祭

若きき大名を出をりゝ外　嵐雪

地宮ハありきまりて宮の

御遷宮

遷宮をおがみ侍りて

たふとさに皆押あひぬ御遷宮　翁

御遷宮の夜桟敷にまゐりて

大工達のおかしき顔や神の秋　其角

行秋

行秋や身に引まとふ三布蒲団　翁

蛤のふたみに別れ行秋ぞ　、

行秋猶たのもしや青蜜柑　、

行秋や手をひろげたる栗の毬　、

行あきや梢にいのる鐘　丈草

行秋の四五日よわる薄かな　、

暮秋

天和ノ吟なり

懐ニ老杜一

風髭を吹て暮秋歎ずるは誰が子ぞ　翁

九月尽

清水の茶店に憩ふ

秋風の軒をめぐりて秋くれぬ　、

去年此比に出給ひしを思ひ出て

あふ風も今はむかしの世の名残

千篠かな

新政の月見ぬこそや九月尽　其角

九月廿七日の月を惜

見し月やたゞのうきよも九月尽　、

憩ニ閑ニ雑一訪

蜘蛛の小唄きのふし九月尽　、

秋の終柴杵とこそ尾をくゞりて

栗料に小豆の一日草の庵　翁

秋雑

秋の日ニよりしきりにあるまじトアリ

土浦の秋トアリ

深川の庵を拾きて

秋十とせ却て江戸をさす故郷 、

若嶋神家

木の松も実生や千代の神の秋 、

見わたせば泳ぎ見れば浜蜃の秋 、

あちこちの中し田面の錦や星の秋 、

種の浜にて

さびしさや浜蜃に勝る浜の秋 、

小名木深相実景行

秋に見るも守や住は小松川 、

庵をかまへんとて句を書き出せける

道好の続ケリ

更級吟行句より

秋の色めでたきまゝに錦の常 、

あやしは萩遊ぶをまち路にて錦

寝ぬるまゝ人寝ぬる宿寝ぬは仰う

粕鼓ハせまし

野老しるき秋の紅葉や宮の寺の旅 、

秋の宮や吾の井の風の音 、

留別

送らるゝ送りつ果ハ木曾の秋 、

さゝくまゝ人秋よ船寄のひとつ錦 、

旅して小家ハ秋の柳しの常 、

棚懸ゆの野に秋ある菓出升 、

いく秋の世なりて罷子に埋ぞける 、

小文庫ニカクアリ三州爺ニ
秋風や相ニ動テト再案ア
リト云

振らまし秋のなごりや菊の霜、　拾懐

山の秋まつ何を来たる雲ならむ、

芝柏亭

秋ふかき隣ハ何をする人ぞ、

同言　旅旅の途中にて

身の秋や赤子もおはる鉢被山　雲角

小原女やちらちらせし花の風、

中村少長夫婦送別上京

出時

山もいま人をうつしむ振袖かな、　素竹

上ニ白髪やトアリ

尸のみ枯枝かるこの戸を見れば　嵐雪

宰府奉納

菜秋の白髪も神の光これかな　去来

旅宿の園にて

福岡や子賀にあひしまふ房もちし

老神職のうやまひ人を貰ひ

菊も實に咲楊子菊し神の秋、

ころこのる肩にも須磨の秋、

果木の家にて小姫のもてなし

鳳にまかせて

肩にみ井に袖を濡らす浦の秋、

朝夕の秋のめくりや原の庵　丈草

須磨
緑めあふ秋のあはれや寺と舟　、
細溝は秋をまたぬる山の声　、

神無月

神旅

神送

冬之部

摂津國にて
住吉の松は中坪くありけり神無月　其角
神無月ふくら雀そ見に寒き　、

末の露境にて
秋の日に又浪さはくや神無月　去来
霜月のもめ武江に到る
新米や神も旅宿の日数かな　蕉
神の旅浜の宮に来にけり　其角
布子着てさびしき顔や神送り　去来

神留守

冬空

小春

亥猪

初時雨

前書ハ梅カ枝の謡の文なり

留守の間にあれたる神の落葉哉　翁

大黒の賛

神の留守たのもしく女房をもちやへし　嵐雪

我宿はなからうらあり冬の空　翁

翁追悼

ゆり来る小春の海や墓の前　丈草

三日月のなくてさへ玄猪の夜　其

人の話へさしめて行　角

ふりしも初の字を我時雨の冊子　翁

きやものかへるにいふ霧のむかう

の宗あらうせきくる袖をのる

しきて初なりあさや旅人

旅人と我名よばれん初しぐれ　〃

伊賀の山中

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり　〃

旅亭にて

あふ事のありて人に年よる初しぐれ　〃

常の物ひとつ旅もねてしぐれ　去来

国々の墓所に詣し芭蕉の霊

芳しめる三年の裏を疎にして中に

湖上の木曽寺に書きて地蔵の

手ずから人々の与へよる袖の

泪を一人しそせをまもる旧寺の

夕くれ初しぐれの時に梵庭所序

のつとめ禄は出家之徳にて蝉殻は
ひとり銭なく施ある身なれは蕉
くの手向は心にまかせたる所なり
ちのまゝ芭川の小石にのきあつめて
芭経の字品を寫し菩提を
いのり其恩を謝んと手を野へり誅
は此叟の夢のことく妙々たる心ばへの
限りに筆を投うちまくを措て只
墓前の石の文字を見るのみ

石経の墨を洗ふ哉しくれ　史邦

雪散し松かさの幽の初時雨　ゝ

右田桂木丈事

時雨

延宝中ノ吟

天和ノ吟

発句集ニ笠雑キトアリ

句撰一座旧ニ誤ル

ひとしくれ礫や降て小石川　翁

芭の日よりて時雨に逢て

笠もなき我をしくるゝかこは何と　ゝ

桐葉ぬし志浅からさりけれは

しはらくとゝまらんとせしほとに

比海に草鞋すてん笠しくれ　ゝ

草枕犬もしくるゝか夜の声　ゝ

しくるゝや舟の帆柱つたひ行　ゝ

鶏の声にしくるゝ牛屋哉　ゝ

一尾根はしくるゝ雲か富士の雪　ゝ

美濃垂井宿規外かもとにて

やとりかりして

作り木の庭をいさめるしくれ哉 〵

舊里の夢をみて

しくるゝや田のあら株の黒む程 〵

嶋田雅樂塚本か家に到る

宿かりて名をなのらする時雨哉 〵

馬かたはしらし志くれの大井川 〵

新藁の出初て早き時雨哉 〵

山城へ井出の駕かるしくれ哉 〵

[illegible]の庄や家の[illegible]時雨 〵

人々をしくれよ宿はさむくとも 〵

あ[illegible]しられ來る板の縁の[illegible] 〵

神[illegible]の[illegible]時雨の形 〵

其角

続猿蓑ニ宿かりてトアリ
誤りカ諸集宿かしてニ作ル

[illegible]の松

しくるゝや[illegible]し廟の[illegible]松 〵

[illegible]しろき人を[illegible]しくれ哉 〵

大和めくりせし頃

[illegible]時雨に[illegible] 〵

翁病床

[illegible]より[illegible]時雨かな 〵

芭蕉翁之回

しくるゝや[illegible]墓 [illegible]

当[illegible]寺[illegible]の院

小夜しくれ人を[illegible]山居哉 〵

[illegible]寺より西の方[illegible]

夢中ノ作ノコト雑談集ニ委シ

去来抄ニ名所ヤ近帆ナドナラ(?)ニしらるト再案ノヨシ有リ

葛松原ニ池ナラヌ地ハ常ニ...一面ナリト云

見やりて

こえの方さへ西河のしぐれかな　　雪窓

松原の遠かさ見ゆるしぐれかな、

遊雲閑寺ニ

八幡の楠の板をさびしく出、

松原の里は細きるしぐれかな　　嵐雪

茶店を裏て出かれあからめ、

浮石や出る時雨の出船し、

いそのしほ沖のしぐれの苫帆かな　　去来

臨川寺

木のうらしの地の嵐さぬ時雨かな、

志さやれ紅葉小袖を吹かへし、

雲よりも先に出る...時雨かな、

山様の流...ながるしぐれかな、

義仲寺にて

夢の...袖の...、

...のしぐれ...時雨かな、

...時...のしぐれかな、

牛...を...出...、

一...の...をしぐれかな　　丈草

...沖の時雨の...、

...人...のけぬ...瀬田の橋、

...の...雲の...、

松...の...時雨かな、

鍋さげてあさくさのけや嵐しをき　支考
風雲や志ゝるまき見る法の花　〃
海山の志ゝを清き庵のうち　〃
城中園菊塚手向
九月やしろまき雲の座光り　〃
所思
老を見る　梅の終り残して世　〃
月代や志ゝきの中のむしの影　〃
笠まで金の首てはよ終ひ試合
愚かなりけり　狂嵐すゝめ出り
銭つかしたるまでも人銭をゝあそ
皆ヶ覚へたるもの　狂歌の才士

木枯

狂句ノ二字後年六除捨玉ヘリト云

あの國もおもひしるの深思
ひ出てかつらし侍る
狂句木からしの身ハ竹斎ふ似たる哉　翁
竹の画讃
こからしや竹ふかくれてしつまりぬ　〃
木枯や頰腫痛む人の顔　〃
三河新城の家士菅沼権右衛門亭
京に倦てこのからしや冬住居　〃
鳳来寺に参籠して
木からしに岩吹とかる杉間かな　〃
文ハ略す
木からしよ世に拾れぬみなし栗　其角

井波門左庵心浣般

ありさらとらひとつ山の二集

ゑらきのふり　出不覚

木がらしや沖より寒き山のきれ　其角

芭蕉翁回忌

旅のふきかへりらしろきのこしる

木枯り猫の稀の出ありの姫、　嵐雪

名川寒かな

あめりしの初の小松く庵木戸、

義仲寺興く四七日翁之塚

木がらしの猿が鄙灘の葦ぞ笠、

賀栖波山撰集

木がらしや剣をふるふすゝき山　去来

翁病中祈祷の句

木がらしの宮居凄しや錦の扉、

木枯のあたりをてらすや柳　丈草

奈良の玄梅蕉翁の木がらしの

句八帖寫しけるをみる句

夢見て翁の翁肖像を書て

讃岐寒さ幸ある

旅の声も粽のふし　夢の中、

何となく冬枕識をききのれ冬　其角

冬ま戸や鐃のさらさて冬の月、

あつ猫のこの汁出来て新や冬の月　去来

冬夜　冬月

寒

雪よりも白し髪に冬の月　む笑

池下の茶店にて
枯葉を焚て手拭あぶる寒さ哉　菊

織人と吉田の郷にて
さむさ哉しらずるり旅寝をなのしき　〃

元朝和尚より酒をたまはり
ふるまひ人しふたまりける

水寒く寐入かねたる鴎かな　〃

鍋ふたや宿りの日の暮寒き　〃

塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店　〃

仙台ら文の返事
袖のうらよられて寒し濃鼠　〃

的墨ニ洗ひなてよトアリ
句集洗ひあけたるニ作ル

葱白く洗ひたてたるさむさかな　〃

何ヶ安息の土牛島山に茶店
しばらく休らひて

一夜寐て寒さをしらん笑の庵　〃

使者来り書院へ通る寒さ哉　素角

大和めぐりせし頃
高取の城の寒さやよしの山　〃

山寒み寐ての後る頃に有寒し　〃

堀川を通りて
足形のふりの向の寒さかな　去来

悼む笑ニ
寒き夜や思ひつゞる山の名人　〃

冴

冬籠

炭俵小文庫続五論真蹟集ニ古さよトアリ笈日記ニ金屏ゆトアリ三州紙ニ古びやトアリ

翁の病床に侍りて

うつくまる薬鑵下の寒さかな　丈草

神杉の冴あむしのけや鶏聲の夢　、

ふゆこもりまたよりそはん此柱　翁

金屏の松の古さよ冬こもり　、

贈洒堂

湖水の磯を這出る田螺一疋

芦間の蟹のはさみを恐れよ

牛にも馬にも踏まるゝ事なかれ

難波津や田にしの蓋も冬籠　、

梅七に示す

舊里を立去て彦根野に

かくれしふ人あり農侯何

うつし水木の花めにかをとゝめ

人をいゝはしめて其の猿が如淪隠

ゝ功をあらはし陶偲が故如を志

ある縁や菊にその人をこゝろへ

らよきのいきの花にあし佗

下往りかは上戸の人ありさり

料君は鐵肝石をむすの花の佗あ

そしてその菓をとゝむへのこゝろ

先祝へ梅を心の冬籠り　、

千川亭に遊びて

折々に伊吹を見ては冬籠り　、

冬構

幻住庵にて

雑炊のなところならば冬ごもり　其角

新宅

嵐ふく野わけしまん冬ごもり　去来

身をよせて荷物の間や冬籠　露沾

翁病床

白粥のあまりすゝるや冬ごもり　〃

墨染の眉の毛ながし冬ごもり　〃

其角へつかはし

鶏のこゑ聞て家や冬ごもり　〃

鴉のこゑ見知りてや冬ごもり　丈草

山里や束ね捨てし冬構　去来

冬雨

初霜

霜

夜着ひとつ祈出したる旅寝かな　翁ハ初霜ニ入

笈日記ニ逸（杜国）ともあるニ誤ル
泊船集の庵ニ誤ル

面白し雪にやならん冬の雨　翁

初霜や菊冷えそむる腰の綿　〃

淀にて

初しもに何とおよるぞ舟の中　其角

あの霜の消ぬよりさきに野は色　丈草

このころは野山に深し竹の霜　翁

[illegible]

霜寒き旅寝に蚊屋を着せ申　〃

穭田の霜の花見る朝日の影　〃

みかけて寝らん菜の花や夜半の月　〃

逸（ニ）杜国

さればこそあれたきまゝの霜の宿　〃

菊の紫紙表具させて半さの露　翁

病中

菜のむきして声の枕の外　〃

深川大橋架橋せし時

ありがたやいたゞいて踏橋のしも　〃

酒の子きく妻の子のまくりの料

を送りてはれは

火を焼てあけよいはゞ屋根の雪消えん　〃

橘おきたり一俵の米部あり

宇津の紫花を併讃り

見つけ給ふを取得るなり我

を志てつるよしゆへ侍ふみ

粟飯の集くて白山や雪の麓　是角

妙なる妻女を葬りて

雪の鏡書てみらんは襟をかきあはせ　〃

山行

山おもて下の嶋出まで雪夜の明　〃

雪翁の衣しや流れ出る雪の笠　嵐雪

丈草の持より翁のちかくに病める

あけぼのは獅子の尾の深みして

人死さへ雪となしてや雪の野

茶湯の清の茶杓に入るものし

袖さぞやり人参湯んで慕来り　去来

詩文等

初氷

笈日記 孫橋トアルハ誤リカ

氷

真蹟ニ櫓の声ニ腸氷る夜や涙トモアリ 天和年間句ナリ

同上

笈小文ニあかつき(?)…雪の日ヤトアリ

續猿蓑ヲ初メ趙南の忍ニ作ル 凡ハ書損ナリ

霙

霰

芭蕉談ニ子供等を まりにあつまるトアリ

さるや庵をかこむ霰の箱根 ヽ

木曽塚の旧庵に係りて

初霜や茶囊(チヤノウ)の後猶きはめ(?)編 丈草

苅(?)株やきらる編の田井の初氷 翁

深川冬夜感

櫓の声波を打て腸氷る夜や涙 ヽ

茅舎買水

氷苦く偃鼠(エンソ)が咽をうるほせり ヽ

詠杜園經行

きくきくや鳥(?)さえて氷る鵜法師 ヽ

花鳥の…男の心をいへる山家集の類ひならん

一露もこぼさぬ菊の氷かな ヽ

瓶わるる夜の氷の寝覚かな ヽ

廣澤

池の面雲のゆききや雪宮山 去来

きびしさの旅ぬ宿にて降られけり 丈草

石山の石にたばしる霰かな ヽ

いざ子供はしりありかむ玉霰 ヽ

自画自讃

いかめしき音や霰の檜笠 ヽ

膳所の草庵を人々訪ひける時

霰せば網代の氷魚を煮て出さん ヽ

ある人 文

後旅集ニ琵琶行の句アリ
有磯海ニ雑炊ノ句出角
案ナルヘシ

続猿蓑ニ嵐ハトシテ里
甫ヘ譲リ玉フニヤ

冬しらぬ宿や籾する音霰　翁

旅宿にて

琵琶行の夜や三味線の音霰　ゝ

雑水に琵琶きく軒のあられ哉　ゝ

再芭蕉庵を造りいとなみて

あられきくやこの身はもとの古柏　ゝ

いさゝら立寄引ちるあられかな　ゝ

海へ降あられや雲に波の音　素角

こゝの[illegible]木綿に消る霰かな　ゝ

出さし[illegible]の霰のこぼれ[illegible]　ゝ

武士の足で米かるあられかな　嵐雪

頬出し[illegible]玉霰　ゝ

志巻

初雪

花摘ニ雪ゝ[illegible]云云瓦蕉トアリ

老武者と指やさゝれん玉霰　去来

松杉をほめてや[illegible]あられかな　ゝ

飛入の[illegible]の中　丈草

霰降る宿の[illegible]や蓑の夜話　ゝ

[illegible]や[illegible]　[illegible]

家守の戸の初雪とんと[illegible]　ゝ

ありて[illegible]

帰るさ[illegible]

師走八日[illegible]初雪[illegible]

南都大佛再興

はつ雪や幸庵にまかりある　翁

初雪やいつ大佛の柱立　ゝ

句撰 なそむ 松ト誤ル

初雪や聖小僧の笈の色　翁

深川大橋半ばかかりける時

はつ雪やかけかかりたる橋の上　ヽ

初雪や水仙の葉のたわむまで　ヽ

立継細

はつ雪や内にいそうな人は誰　其角

初雪や赤子に見する鍬形げ　ヽ

はつ雪や雀の枝持の小ね筌　ヽ

楠の網壺四男小一間ほとのや

萬家暦なうるわせ

初ゆきや鍋とも縁の大綱壺　ヽ

はつ雪の気やなしさ人のき添め哉　ヽ

続猿蓑ニ橋ありトアリ五元集ニ橋あるトアリ

雪

延宝中ノ句ナリ

延宝九年東日記ニ富家喰肥肉丈夫喫菜根予乏トト詞書アリ

同時代ノ作ナリ

同上

市中笑

初雪や門に橋ある夕まくれ　ヽ

西運寺興行

初雪や人のわすれの伏見舟　ヽ

めつらしや冬の降まで垣根哉　ヽ

粉米かえし

初雪や四五里へだてて比良が嶽　去来

雪の竹節ぞへつる節あかん　翁

雪の朝ひとり干鮭を噛得たり　ヽ

子弘投られたる人のなさけまで

高山かさかや世はきさのすの雪の哉　ヽ

市中の雪松深き園の葉この形　ヽ

熱田御修復

磨なほす鏡も清し雪の花　翁

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈残し　〃

其の中の雅人とあん世にきこえし

歌よみて老の後志賀の里にこもり

世を侘しと聞りし大津松本なる

墨染の尼とかや老尼の許に参り

雪ふる日ふす事出来る清水にて

物語しける序ありて

少将の尼の咄しや志賀の雪　〃

湖水眺望

野ざらし紀行春の日ニ出

日ころにくひの再案ナラン

甲子紀行ニ市人よ此笠うらう雪の傘トアリ初案ニヤ

比良三上雪さしわたせ鷺の橋　〃

大雪や嫁めくひとり信濃の家　〃

日比にくき鳥も雪のあしたかな　〃

旅人を見る

馬をさへながむる雪のあした哉　〃

草庵に士あり

木枕のあかや伊吹にのこる雪　〃

湖水の見えけり比良の雪　〃

庵にかけて

深川や根こしの芭蕉雪のうち　〃

抱月亭

市人よ此笠うらう雪の笠　〃

杜園亭にて申あきゝ人の
子ほうくさりつゝ侍るに
雪ふる山家にて師走の明日か　翁
箱根こす人もあるらし今朝の雪　〻
小町の画讃
たふとさや雪ふらぬ日も蓑と笠　〻
寒山自画讃
庭掃て雪をわするゝ箒かな　〻
閑居箴あり
酒のめはいとゞ寝られぬ夜の雪　〻
於深川草庵にて
京まてハまだ半空や雪の雲　〻

三州紙ニハ雪ちるアリ泊船句撰雪の中ナトアリ書損カ

山中小子に侍りてあそひて
雪の中り宿の昼の葉つゝ琵　〻
竹の讃
たわみては雪待竹のけしき哉　〻
望二叡山一
降雪や大の字こゆる山の字　嵐蘭
門の雪携ありやうもてもてけり　〻
芭蕉庵をとひて
褻花も籬にあけたる庵の雪　〻
戸障子のまた雪なり松の声　〻
雪の日や新田よりの紙の衣　〻
ひとつの宿にて

鹿島紀行ニつくは山むかふトアリ

なのつくに貞しきハかくし雪の暮　〃

ふし山の讃

寐る思ひ門の雪まくた広哉　〃

我雪と思へハ軽し笠の上　〃

杉の雪黄なりぬらつの出の月　〃

湯殿人行急仏家り夜の雪　〃

雪ハ申さず先むらさきの筑波山　嵐雪

今の露団子助六門に見おさめてなき

明星ハ広左にいはる雪の夕人　〃

須沼の出に蹄更に出る笠の雪　〃

門の雪碍ろ樂の出てのこの形　〃

行の雪なかのる屋見出との世り　〃

イ炭ニ誤ル

銚に火はよ木兎に世に雪の猫　〃

雪中に雪ふる松あるあるひろ風　〃

浮庵の戸に花世界や雪の夜　〃

落ありて志ける雪のひのりの風　〃

東葉椎のうち哉　その侍り

常ならぬもふと嶽より出る月の

東門かのく里かしの朝り形く

能てとかり出雪ハ

あした萬の国雪出るに飛との形　〃

應からみて出るや雪の門　玄来

きめ實の清ふる木小舟の影　〃

雪の路のあくる御に形めり出す　〃

九重は九重めく雪の厚さ哉　去来

なのめなる奥のこゝろや此比の雪　〃

旅人のおくに通りし雪の朝　〃

雪空や鬼も狼も出ざりけり　〃

降浪花君

ちる時や空に冬降出色の雪　〃

嵯峨茶屋や雪ふるさきに旅籠町　〃

縄の中に居て見る雪の山縄の風　〃

軍書を読て

雪ふるに常も驚く山家のはづかしき　〃

雪空の心て誘ひし牛の留守　むす子

旅の静りさまになりし雪の夜　〃

ありこの人も山の雪見にし雪の哉　〃

納豆たゝく音や野の雪燈し　〃

松ゆく丘の名所や雪に花　〃

雪はい山雪ふるとき何て帰りし　〃

雪の中に降ても峯の雪の雲　〃

名も雪を見て中河や雪の友　〃

都の人にや来しあるを　〃

山雪の降り来し中ゆく家の雲　〃

嵯峨野の家に居て

紫の庭や松の下に我る雪の衣　〃

去来か庵をも訪ひたるの名を

よく

雪見

延宝天和中ノ句ナリ

句撰拾ニ誤ル

曠野集ニいさ行んトアリ

小文庫ニいさゝらハトアリ再案ナルヘシ

[illegible] 文字

[illegible] 翁

[illegible]

二人見し雪は今年も降けるか 〃

いさゝらハ雪見にころぶ所まて 〃

[illegible]

[illegible] 冬角

[illegible] 文字

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪丸

[illegible]記ニ君火たけトアリ

柴折くぶるたすけとなり茶を煮る

夜は来りて軒をたゝく性隠閑を

好む人にて交り金をたつある

夜雪にとはれて

君火をたけよき物見せん雪丸け 翁

十月廿五日共挑[illegible]出武江而[illegible]

義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

上略

霜月七日のゆふつくよ[illegible]義

仲寺の塚上に[illegible]

華[illegible]水月[illegible]

心鏡一基[illegible]八方[illegible]

雪仏

雪吹

冬野

冬海

冬川

炉開

うたる法師あの花を拾ひて
えつゝ雪を利し他をも利して
終り其神石鍋となる見る人
今は炉路へとて
雪の中行くのくならん雪ほとけ　嵐雪
ひとつ家の手をも炉や雪吹の豊嶋(テシマ)蓙(ゴザ)　去来
むら雲の岩を出すや雪吹の根　丈草
まてゝ人やあらてきうふ冬野哉　素角
住吉にて
芦の葉をよりかゝりや冬の海　丶
冬川や筏のすがる竿のさき　丶
炉ひらきや左官老行鬢の霜　翁

イニ口切ニ誤ル

口切

十夜

御命講

夷講

三年成絵の囲ひの
炉ひらきや汝を作る雲の子を　素角
炉開の日を出しぬる菓子の菓子　嵐雪
支梁亭にて
口切りに堺の庭ぞなつかしき　翁
亡師終焉
ともに浮ぬ雲を十夜の波の声　去来
菊鶏頭きり尽しけり御命講　翁
消息
御命講や油のやうな酒五升　丶
夷講酢売に袴着せにけり　丶
振売の雁(カン)あはれなり夷講　丶

炭

延宝中ノ吟ナリ

同上

榾

炭屋十左衛門売出て、

嵯峨山や都は酒の売ひ時雨 其角

行かへる炭の戻りや帰り果 去来

小野炭や手習ふ人の灰せゝり 翁

白炭やかの浦島が老の箱 〃

消し炭に薪わる音か小野の奥 〃

炭焼の顔りてあらん竈のきハ 其角

あるとある炭の木の葉くべて熾（オコ）り帯り 〃

消とみへて床にふしぬる木の葉哉 〃

炭竈や煙の人も棲かはり 丈草

榾の火に親子足さす侘寝かな 去来

榾の火や暁がたの五六尺 丈草

埋火

火燵

少年をうしなへる人の許へ申遣す

埋火もきゆや涙の烹る音 翁

曲翠旅館

埋火や壁には客の影ぼうし 〃

埋火や土器に残りけり焼 其角

起りけ迄思ひ出る火燵哉 翁

住つかぬ旅の心や置火燵 〃

尻あての長座の法師の火燵哉 〃

団坊主の八丈あてゝ人ぞ娘子

行すゑ一生経ずしてなきを

炭掻て握らせば中屋のゆか

中にぞりや常なる銚子を控へ

句集沢著ニ誤ル

初蝉ニ定家卿ノ歌トアリ

出て

火燵のゝ素破ら鍋を拾ひけり　其角

源忍世来ニ善導慧心ニ

つゝめとし顔にあてゝぬ火燵かな　嵐雪

持病より起きり帰る須

看病にひかり出る火燵ゝの形　去来

草枕中や火燵きらゝ由有の影　ゝ

草庵の火燵の下や古狸　丈草

下京を巡りて火燵行脚のかな　ゝ

おらくし眠さし出むらきつか　ゝ

宿かる火燵を庵の布営み影　ゝ

火燵ありし嵐と雪は山や初ふ

頭巾

紙衣

行燈の森をあゆみしきゝふ

紙帳して

山中や起てふ紙帳の中紙蓋火燵　ゝ

貞徳の賛

雅名やさらぬ翁の丸頭巾　翁

深川ハ貧の中

米買に雪の袋や投頭巾　ゝ

頭巾着て顔さし出しや縄衣　ゝ

おもへつよ雪見にまかる紙衣かな　ゝ

長途相侶

紙衣着て渡る瀬もあり大井川　其角

加生か妻のふつゝのひきを見て

縫かゝる紙衣りいくん嵯峨の冬　其角

打のめし蕉の垂露や紙子夜着　ゝ

寝て起ては猫も紙子に中なかり　史邦

貞享

霜月の紙衣の切を譲り帯け　ゝ

紙子着てえらぬ火燵のもとり家　ゝ

仏家に入のちよりその粧ひ

立なからそのまゝ宮の絵姿にして

都をさひて

鰭中ある紙子の宿や竈土居　ゝ

極月十日西行大坂へのわかれ

足袋

いそのりや足袋売に逢うつの山　其角

衾

濱山ニ我書ノ句トアリ画賛ニヤイカヽ

草足袋の四十に足をふみ込む　嵐雪

足袋もはきて寝る根猫も女房哉　ゝ

畠濱

わかむかし寝覚まさる衣の紙衾　嵐

延寿亭

寒き夜に国土の民をおもふかん

寝ぬ夜の野にしみて紙衾着つゝの世

絹ひきかゝるなり

紙衾よし御衣の天下の衾なれ　嵐雪

草臥る旅の娯

蒲團

このまゝ蒲団や花さく夜や海き　翁

寝たる後も火燵にありのさめぬ間　其角

火桶

京にて

蒲團着て寝たる姿や東山　嵐雪

先師十三回忌

嵐雪の蒲團はのこる木魚哉 、

あらしのあとのおこりたる火桶の灰　翁

古き代をしのぶにて

家の後格子破る火桶の形 、

朝叟老父七十賀して

白川の浪をしのぶや桐火桶　雪角

火鉢

深草や見ぬ深草火まちち哉　翁

復花

耕雪亭にて

池のほしに白妙やつもりし帰り花 、

散紅葉

こへり花[illegible]　千角

祖翁百叔追福

十月を紅葉のちるをしむ花　嵐雪

月の澤に紫ちる楓無寺に擂の
心を澤して

[illegible]　翁

落葉

[illegible]

百余の半ば紅葉を[illegible]の落葉の底 、

木葉

貞徳の短冊を見ける

宮人よ我名をちらせ落葉川　翁

舟縁の笠にたまれる紅葉哉　丈草

賽銭も落して拂ふ紅葉の風　去来

翁七回忌追福の時法華経頌

字詞書に

待うけて綻ふものか風の落葉ちる　丈草

大津にて

三尺の山もあらしの木の葉哉　翁

九とせの春秋市中に住侘て

居を深川のほとりに移す

長安は古来名利の地空手にして

金なきものは行路かたしと云

けん人のかしこく覚侍るは此

身のとぼしき故にや

柴の戸に茶を木の葉かく嵐哉　丶

幻住庵

木からしに山ふきぬる嵐の木の葉哉　其角

十月十三日辞世

一葉ちる咄(トツ)一葉ちる風のうへ　嵐雪

卯七に逢て

草を経て葉末しる嵯峨の木の葉哉　去来

水底の岩に落つく木の葉かな　丈草

冬木立いつのめし中山の木の葉かきよせ　其角

冬木立

ゆるひたる三井の仏生や冬木立　其角

柯求老人の手向

山茶花や和らかにちるも山寺の　〃

垣のうちに白き錦や霜の菊　〃

霜の菊枝をさかえし都かな　嵐雪

寒菊や粉糠のかゝる臼の端（ハタ）　翁

寒菊ハ浅茅ニ曰の侍トアリ

先師初月忌

法中に寒菊ありて尉へたり　嵐雪

其角本覚寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす　翁

熱田桐葉人亭蓬莱の閑を拈申しよせて

水仙

水仙や白き障子のとも移り　〃

三河のくに白雪といへる者の子二人へ桃先桃後の名をあたへて

其の名は桃より白し水仙花　〃

水仙や狸の行や宵月夜　其角

大町新宅

水仙や絶（カンサ）つきての北の鳥の声　〃

蕎麦刈

刈あとや早稲かた〳〵の鴫の声　翁

麦蒔

亀杜園二句のうち

麦生えてよき隠れ家や畠村　〃

冬枯

冬の日や畑ハつゞきに風の音　〃

冬の日の磯に冬き男鶴冠（トサカ）葉ちり　〃

枯野

翁一世ノ句ノ終ナリ

翁を送りて

[illegible]の紙衣[illegible]中草の雲　其角

大井里

されの木の月見んと[illegible]　去来

旅次病中之作

旅に病て夢は枯野をかけ廻る　翁

[illegible]の翁常に紙衣ぬかず[illegible]　其角

二枯を経て深川の草庵より

[illegible]落葉門人日々に来り

[illegible]

枯尾花

ともかくもならでや雪の枯尾花　翁

芭蕉翁終焉の記文略

枯葱

甲子紀行ニ熱田ノ社ノ頽破セシ文アリ

枯草

大根

[illegible]枯尾花　其角

熱田にて

志のぶさへ枯て餅かふやとり哉　翁

霜の後撫子さける火桶哉

草[illegible]子の[illegible]　丶

夕照[illegible]狐　去来

消息

三十里[illegible]大根の[illegible]の[illegible]　翁

消息

菜の後大根の[illegible]　丶

以上[illegible]大根　丶

大根引[illegible]

大根引　陸奥衛ニ亦坊主乗せてトアリ

冬菜　雪丸二夜のトアリ

干菜

茎漬

蕪

鞍壺に小坊主乗や大根引　、

玄関子指鍼の菜根を解

了隣白大を了語語

（　）の大根のりきしるもし引　、

山畑にある鉢ありり大根引　其角

おもりに引人のあり京大根　嵐雪

さし鍋る薩の夜や冬菜売　蕉

玄窓ともやりりみるまさ干菜かり　其角

その日窓よるもして

窓見よや家子のいる小学の柵　嵐雪

茎汁や雲のあり見ゆ路ハ又　其角

猫まめハ　根屋の里　茎漬ハ相府

千鳥

たうし笠寺ハ雪の降日

星崎の闇を見よとや啼千鳥　翁

一ふきの　風の千鳥ハ川添り　、

千鳥立　更行く　初しもの　其角

村千鳥その夜ハ寒し　庵の窓　、

暁の千鳥の足ハ　心ありり　、

城跡の　篠原に　小夜千鳥　、

月の出や　笠に伊勢の浦千鳥　、

あら磯や走り馴たる友千鳥　去来

暗き夜の　河上の　かるき千鳥かな　丈草

小夜千鳥庚申待の舟屋形　、

備亡師縫爲

暁の墓もゆるぐや千鳥数寄 、

鴨

句集ニ十五年ニ誤ル

尾張の国熱田にまかりける比
人々師走の海見んとて舟さし
出て

海くれて鴨のこゑほのかに白し 翁

鸊に流れてぬけしものゝ足 、

[illegible]鴨の声ふりて渡る月寒し 嵐雪

藻に河さ根中に池のかも 、

鴨おりて水中に出る氷の郷 、

[illegible]鴨や弓矢を捨て十余年 去来

夜鴨きて舟にまかせて鴨の寝覚 丈草

素枝の寝覚し小鴨の声 、

水底を見て来た顔の小鴨かな 、

鳧

句集ニ鴨のきるもやニ誤ル

翁病中祈祷

[illegible]出て鴨のきるもや祈るる比 、

十石の鷺になりてあり読安寺 其角

都鳥

京移る人に案内して

烏帽子着て舟にあそぶし都鳥 、

鷹

杜国を訪ふる悲しきの

鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎 翁

杜国か不幸を伊良古崎にたづねり

鷹の声を折々聞て

夢よりも現の鷹ぞ頼もしき 、

めづらしき鷹わたりぬる篝哉 其角

末兎 網代

河豚 延宝三百韻ニあら何とかあやトアリ句撰きのなゝト誤ル

瘦の眼のこの世かはりて見る寐犬哉　丈草

みつての路中に人に絶さる里　雪角

鯉あらふ網代の杖の来るなれ　ヽ

あらふる大根ぬまへとこのあたり　ヽ

静さも珠数は打ちまくる網代守　丈草

あらゝ何とかあふきのふれるさくら汁　菊

河豚汁や鯛もあるのに無分別　ヽ

あら嵐なる吉事ぬ傑ありつゝ　ヽ

いさゝ雲のきもしへを守る

見得のさましあくせやふくさ汁　ヽ

未名ゝ拾ひて越田ゝ到る

あらぬ来ぬ河豚つり鱼て七里辺　ヽ

五元拾遺ニうくゝゝゝ誤ル

河豚あらふ氷のきらりや下河原　雪角

吹井の浦よりちめぐりて

ふくとつくへのなたるあひさ哉　ヽ

父子同歎

河豚汁や喰き婦かる杖こもし　ヽ

手拭切ていはふれし河豚の面　ヽ

邪淫

あら嵐ぬあくまみて小枝夜　ヽ

鯖に海ゝ鯉ふらゝ雲の河豚　ヽ

父は醫師かをかい飲り

河豚汁にまく其学のまなされ　ヽ

盗人に起はゝれもはへん河豚の鉢　志求

鮟鱇 生海鼠

魴

冬蠅 冬蚕

霰酒

黄凍

鮟鱇もありせ年見かしめ厨やの風　其角

生ながら一つに氷る海鼠かな　翁

海鼠腸ふ八重さくらの脇備へ　嵐雪

海鼠たこにむつのしき安や猫ゐ　〻

尾頭の心もとなき海鼠かな　去来

魴鮄や家ゆつ見る鉢水鏡　其角

冬されや蝿のいもしひもの文　嵐雪

隣かて家のしふる人や冬の蝿　其角

初りて霰の茶屋に帰り路かな　嵐雪

去嵯峨の某氏海苔撰集の時

句撰やしらみも蜂寝の身かな　丈草

黄凍(こほり)や篁子の中猶りけり緑　其角

納豆

冬雑

葛松原笈日記泊船
折りかえして旅寝ベト
あるの撰ありき
此二撰ル
十二虫ノ巻トアリ

嵐水三十五日に

朝日ふのさをぬる袖を納豆汁　其角

先師一周忌

夢人の旅を廻(めぐ)る納豆の水　嵐雪

三河国興来寺に詣る道の途より

係の露ぞて蕉の宿に一夜明けて

秋の月ひとつ折り出して枕森かな　翁

紫庵にて

冬庭や月もいとなる虫の吟　〻

大通庵主道寿居士芳名を乞ひて

ひさしきなかにまじえんとの銭拾ひて

路ふ其の身をしふ初冬一夜の雪と

句選ニ其方ニトス誤ル

海ぬらふさぬけひとめくりあり
　動りさぶふさ吟して
こからしや枯木の枝の雪 、　其角
志ろしたかやきしの芝木の女傾白　其角
　好猫ハ市店
人さうんのをしらぬ夕まぐれみ 、
秋出てからの志ぐきやき鉦路巾 、
桃の花母あそや海国の名ぐさき 、
栄きや二度なきて京の夜 、
何となく篠臭そく冬の茶 、
　先師七回忌
ましくさをなのしや生無庵　嵐雪

霜月

袴着

帯解

神楽

五元ニ鼻息白きト
アリ 樣裏白ートアリ

水風呂の気素のめぐりの紫　其角
霜月やのとりへるよりかのこの旅　嵐雪
　卯七亭
霜月や日出ぬ志けく冬籠　去来
　長幼有序
袴着る姫の子ふもとのまろ好　其角
　貞徳翁五十年忌元禄十五年壬
　午霜月十五日嘆舊の心を述へる
帯とき乃花橋の匂のしる形 、
夜神楽や鼻息白き面のうち 、
あくち帯のをりかし形見
らをさへりく

鉢敲

おもしろき維摩経よんて早鉢叩　、
鉢叩やむかし貴高士の山もの也　去来
落柿舎に鉢敲を待て　、
長嘯の墓もめくるか鉢たゝき　翁
納豆切る音しはし待て鉢敲　、
去来に寄る
千鳥なく加茂川こえて鉢敲　其角
とゝしく寐覚ハ悲し鉢叩　、
夫婦有別
鉢たゝき女夫出あるく夜もありや　、
しかりし来る鉢たゝき　嵐雪
冬の夜ハ鉢草見えぬ鉢たゝき　去来

師走

冬のよの門々たゝく鉢敲哉　、
鉢たゝき吟すかうた翁の寺の中
されしらすおもひさけりたゝきたゝ
篝火も見えぬ月夜の鉢叩　、
十鉢を移して秋の額を叩しむ
旅人の跡をもとめて鉢たゝき　、
船岡の鞍馬もひゝきの鐘　文字
一声は家々来しの世　鉢たゝき　、
鴨川の水辺に中鉢敲　、
月白き師走ハ子路か寐覚かな　翁
十二月九日一井亭
旅寐よし宿ハ師走の夕月夜　、

花摘ニ何ニ此トアリ泊船句撰トモニ何ぞこの二作ル

寒

寒雨

寒念佛

寒聲

何に此師走の市に行鴉 、

このくれ又り師走の海のいつかな 、

ふか菊来紙衣

海ゆゑく病を侍る師走かな 其角

山伏の火をきり出す師走かな 嵐雪

からさけも空也の痩も寒の中 翁

有明の晦日鐵さん寒の入 、

さるさしく狸の田面や寒の雨 、

両國橋上

暁の銀波よりさゝや寒念佛 其角

南都にあそべる時

寒声や南大門の水の月 、

早梅 句撰咲つるに誤ル

探梅 笈の小文ニ蕗トアリ笈日記家トアリ句撰春ト冬ト両季ニ出セルハイカン

節季候 句撰来るハ誤ル

此里をほびといふハ昔院の

御門の誉させ給ふ地なるより

よりて保美といふよし里人の

語侍るいつれの文に書とゞめ

たるともしらず侍れども

かしこく覚侍るまゝに

梅椿早咲ほめん保美の里 翁

坊川亭にて

香を探る梅に蔵見る軒端哉 、

うちよりて花入さぐれ梅椿 、

新の梅梅さくさへ咲ん迷ひし 嵐雪

節季候の来れば風雅も師走哉 翁

煤掃　此前書煤拂ノ文ハ偽作ナラン

句撰杉の一本ニ誤ル

素堂亭ノ東忘

芭蕉翁の像に出立ぬ　〃

元日も勤むる芭蕉はせを候　其角

似町かしの画讃

芭蕉忌や口をとがるる渡し舟　〃

芭蕉像は左の耳に修門かな　〃

煤掃や芭蕉門の寒　新菊

旅寝して見しや浮世の煤掃　〃

旅行

す掃ハ杉の木の間の嵐かな　〃

竹脇の五器一具難波女郎　墨

ちりもの葉を落と通る掛けり

宇陀法師ニ古搭子ニ誤ル小文庫ニ古合子トアリ

餅搗　異ニ月代ヤト誤ル

餅花

市ヶ谷

是や世の煤に染ぬ古盒(カフ)子(ニ)　〃

煤掃ハおのが棚つる大工かな　〃

画賛

畑中に古き法の寺や煤拂　嵐雪

独り法師ハ手もりの年とし

煤掃や山風うちて吹通し　其角

暮ぬ日も三十日に通し餅の音　菊

こねて餅と餅の見ひ寐る所　〃

市窓

猫法師我門ゆるせ餅の札　其角

おちは節やしのさしにさせるよめか君　菊

餅莚
豆打

餅莚や竹たてゝ置の新　素角

画讃

もち莚や蔵の日和よし所々　、

途風子の携集を祝ひ贈句ま
みちのくの里は小春ちかしとは言
の葉をもて綾けしたるものゝ
主人の中より出しの餅かな　李
あるへし須洗しを入りて

茅屋り一の寶や豆打しろ　玄来

豆打春夢の中なる笑ひ顔　此角

豆をうへ吹ぬ葉家の出家かな　嵐雪

此句ある家をやき出るを嵐雪の

年暮

住居の見付しき小風をさへゝやとて
の住居なるよし

有難きのさだり申けし年の暮　翁

分別の底たゝきけり年の暮　、

これね出二人の法連なしのこゝろ

出ぬ日まちをさゝきいのしかに杖を　、

捨て松森をのことしの暮られハ

年を出ぬ笠着て草鞋をきなから　、

忘てもしひをりしてしひさし
ふる家のくれかなは

めてたき人の数にも入ん老の暮　、

家業あり何あり思はず

ものや猫の独り泣としの暮　ヽ

盗人にあはぬ夜もあり年の暮　ヽ

蛤のいかる甲斐あれとしのくれ　ヽ

まだ出家のとしの暮　望田のゆかり伊賀の志ら人物のひの為に申ける老のこゝろをひとつの心なり
人ミカヤ出家

墨捨る後の小ふとやとしの暮　雲角

京より来る文の中にて春松の
独り問ふ者あり

行年の半ありしありしとしの暮　ヽ

自悔三十一

子をもたぬつまる人家のとなれ　ヽ

年中の叔下見えるとしの暮　ヽ

鴻部屋の白き浮たし年の暮　ヽ

ゆりもまさて又やきむしるとしの暮　ヽ

大津絵

子親の為に出来しや家のとなれ　ヽ

小絲娘にてふふんとしのとなれ　ヽ

猿猴の手はてをのゝや年の暮　ヽ　嵐雪

物えへもや浮世捨されとしの暮　ヽ

題女房

三盃子（カワラケ）らる悟るをはやとめされ　ヽ

蕎麦打て眉髪ゐしかしの暮　ヽ

それ我庵の芭蕉にやまひあらば
くしゆのりある桔梗の葉の
一葉とくも告ぬし時へる字あん
と抄の山出らむもやりて、
御同しくよむ人ゆのしやうの篇、
本年をのりの古猫の乱れとゝ
やりて常に囲炉裏に寝さし
之れて冬あそり古りなまし山ふ
東坂の句をみての手ある是方の
華よしてそくしに篇ぬ
いつまでの猫をて篤りにとしの篇、
返事も出人となる年としの之也　丈草

岡見

御仏名

年忘

宵は端堂の日より明けて　風京
みちをりに縁結たり
十五日まで申跡しあむ余の之也、
男見せ妹つくろひぬ小家の門　嵐雪
売楽の口をりくさをし法仏名　去来
ともしてもし人ありて嘘そらぬ　篤
酒の酒壺別常京樋丸興行
当る八升を友にやうしとよそれ、
すゝ埋火に酒やとる猫自来　京
都をも立出て乙州を新宅にて
妻をも待々く
人に家を買せて我は年忘、

小文庫浮世ぶし年忘泊舩
句撰年の暮ニ誤ル

衣配
古暦
年市

奥なるのこゝ絵ハ忘しらぬ年忘れ　〻
みのほとを流すとしの濁かゝん　〻
せつこの世さへて兵忘るゝきこえん哉　〻

宗匠有ル義

家の子多く寄かすて忘るゝ哉しらす忘　其角
行燈を消して嵐の年忘れ　丈草

名ある翁の中

松高や雪の古き紙の衣くばり　翁
うつくしき年とる人や古暦　〻
古ふみとさへ知りまい人のなきぶらかされ　嵐雪
一休ハ出家かいげんとしの市　翁
年の市線香買に出ばやな　〻

年取物
行年

修行者はさゞや年の市の音　去来
としの市誰を呼らん羽織どの　其角
葉さへ松ふきて市のゆふあらし　〻

海ある所へ来たる柴を画て

須磨の浦のとし取物や柴一把　翁

画讃

行としや渕ろ親の小松う里　〻
ゆく年や茶り見えぬ梅の花　〻
行としや壁に恥たる覚書　其角
蓑て行年のまうでや伊勢熊野　去来
行としに爰のあるや庭の形　〻
古岩の浦に松ある〻して

年夜　年瀬　年宿　年尾　大晦日　歳暮雑

[illegible]や足の下　ヽ

とし一夜轆(きしり)踏こし日の嵐　嵐雪

年の松や人に手足の十斗　去来

としの夜の鯣や鰯や三の膳　ヽ

年の瀬や引門の松の拘思ひ　其角

うき堅の[illegible]人ハ何にとしの宿　去来

年[illegible]や牛の尾ならの備りかな　ヽ

聖代

鶴下りる日まて多きに大晦日　其角

大年の寝覚にあひて

杖丁に逢ふ[illegible]あかつき[illegible]　翁

日来の咲のり馬のりて

無季

笈小文ニ詞書アリ

句撰拾遺ニ誤ル

真蹟ニ此句雑ニ入[illegible]トアリ

笈日記ニ世の中ハトアリ初案カ

歩行ならハ杖つき坂を落馬哉　ヽ

朝よさを誰まつしまそ片心　ヽ

瓢の銘あり略す

もの一つ瓢ハかろき我世哉　ヽ

布袋の画賛

物ほしや袋のうちの月と花　ヽ

銭の新鋳にて

[illegible]雨や[illegible]宿　ヽ

張笠の説

世にふるもさらに宗祇のやとり哉　ヽ

この[illegible]破にぬらして袂かな　ヽ

妙法蓮華経

十牛ノ吟ヲ附録ス
十牛ノ題四部録ニ出ル所トハタカヘリ

尋牛

呼牛

隠牛

妙なりや法の蓮の華経　定角

十牛之図

往昔異邦の仏鑑禅師十牛の
図して人の迷悟のあひだをあ
きらかにせり見る人を猶

牛ハ春吉妓女也又及ときこゆ
なつかしくハ例なきハ之並不十牛
の図を画讃して笑ひを添
世り　跡をたつねハ　香共角
宵の夜ハすゞしあとの内股の肌
呼子より何とも呼でもきこえぬ哉
夜の衣ハ森ぬれば恋の筆の跡のま

貧牛

廻牛

畨牛

無牛

半牛

送牛

老牛

武士哉やよろこんで祭し　男
小便も覚てあつまる五月かな
わけゝきもて晩傘をもの帯の窓
ありくる桃も床も夢残る
何と取くる根端をきくの花かり
きあらの子手淀羅尾や霜の春
くるもおもふうとんの道へ入しく哉

はしめのうち老て啼のう栄古す　京　以成
鳴峰てそれぞれ雲の露　有苗
黒くさなりぬ月涼汐の海　梅通
露払て笹をおとしぬ竹箒　渓茗
雨きれや統子のたもとの菜和　向月
うき月や御手の袖うつ山おろし　鷹巣
葛ぬ男よ八幡まゐれて妻の月　文海
古沼やさらりく澄るきくの月　月坡
つゆてもる萩も角あるなきかな　頑水
竹様よ掃るて声ゆのくらみかな　芹舎

廣沢やこの什のこ戦く夕柳　出家

家畫こ仕舞へハ志らむ河烟り　摂津　彩左

宵暗の東なりよ来ぬ水鶏なれ　素屋

柿子や余の何とおうさよみ出き　ふ蘭

外山やとりく霞よ蕪子哉　公成

霧むら夕や鶉のなくる馬の猿　白鴉

待る夜の落ひきりたる星の毒　松儔

儚むや月の清さき夜のうけ　月人

堤よしき墨ん昨夜あぬ橋なれ　松宝

一里ちの妻とふ文て招りくさ　峰宿

花の実のなき母手ふある萬株　林曹

醉ふ昨のきめくるの葉あぬ柳なれ　古乙

蝶あきい葉露の影の吹まさりなれ　薩生

岩の戸ふ聲ある花ハ哉雲吹　大和　六燕

踏出れハたち葉の花の露の広さ　河内　古鏡

宿とりや雪の中なる春の月　和泉　清松

明中なき枝ふ鶉けりや夜の花　播磨　芝園

藤籠り付てあけし念仏ふの秋　巴陵

遠うね子鶉きぬ聲や初の花　旋字

見るよの柳よなる啼旅せむ　素柳

花法の右付てあるしふつなれ　友水

花ふきて葉の試よ遠きなり　友月

初のきき噂や野あ跡の松　桂山

菖るよ露とれあし花蓮の雨　柳宿

雨のあとりなや山舟の海の上　雪糀

若草や濡るゝになる雨一日　梅照

冬の夜や一村帰るけしの花　肩考

葉隠にもしる垣根の落葉哉　古呉

影きへて踏ぬ花の名なり哉　水梅

こまれ咲て雨いちれなり燕子花　雨大

宿のれ八降らさてありき里まの雪　淡路 鷺沱

散そろ見えかゝり月の影　行高

明りて降らぬ清しくもある此ろ　阿波 風楼

夕風に小鴨さゝめりの尾越なか　文笠

見えき見や押さぬや花の菊さかな　翫露

冬るその鳴りうき此すこしてり哉　広湖

花の立そのりうきかや霧の山　木兆

月見て出きる茶燈の雲かな　板隆

昇るかすみてはのかき時雨哉　一史

蒲生え花の仕舞のつのぬ此ふれ　桃後

うら畑立そう茶かし花の宿　松丈

朝影の茶ゆくて夕き一むこのれ　羅明

形きかつむ梢よあのぬいるかな　蘿丈

送り紙品付て萩さしろかな　雪暮

降そめる雨や葉は一木ぬ　山契起

柱をおる計よむかる萱れ　駿紀

雨かて朝る川よ蛤の見苦也哉　軽労

雲鶴のおて茶るみかある葉かれ　龍遊

初汐や有にまかせる松の友　秋水
家の汁も菜く押ふ初なすび　半夢
萩の花踏あく山の低さかな　思遠
夕露の足へ重る萩哉　北紀
伸た木の眼にかゝりけり今日の秋　月古
鳥の音も声にそふ花の夕紀かな　照英
ちるまゝに生そめし初時雨　楚宮
浮雲めり見て行くや山の松の丸　学尺
大雁も帆一声のたかさ哉　出羽
風きての羽ふ帆ある蜻蛉かな　彭甫
落し水遠ふまきや七草菜　篆窗
見えきへ声のあるかな草の露　土佐　雲外

三

ここ人の来て画図に一葉かな　嵐夕
出来まして横様の居る家の月　古間
種の名もひとつ巣にぞ花ぞかれ　左衣
梅の月雨遠ての山にまかりけり　穆風
見るよりも大根かな　桃英
積りたる上もなき如月かな　元史
流れ寄る橋にて流し出の跡　梅十
かくれ藪あつての梅かな　賀竹
垢けさの地蔵にゆかる牡丹かな　婦半
涼風の笛から出る宵月かな　伊予　宵居
無山も野ものまき夜の雨　宗雲
何かなるひきまり初唐　笑園

雨雲う乗してもあるや水かれ　讃岐 元業

初声や読みつくさる雨の冴　備後 紫芷

出てめ木の数よみつ村百子鳥　肥後 桃雨

菊の花むだ追ひよ菊つけ花の見かれ　一風

採るの乗る家のそらや月の鉢　馳蹊

菜道の自粉さうてなほの木村　華洋

常なるつ涼しくて森とのむさの秋　仲陶

見わたしの中にゆける雲の峰　二毅

さつはもお宮うつる花火かな　梅栖

わうんてハ水に影きる聲かれ　芋右

おの蝶も更深ちの子切舞かな　左夕

写しぬ男そあての花さかりかな　而目

一つ咲いて葉よりなしぬ花見かな　露什

よく見ればそよりあり芦の花　魚文

出てくる鞘の上むのふ扇かな　偕堂

梢ほどあれて根元ある玉菜かな　梅思

来りしは水かう菜おぼれかれ　其堅

雪が来や青有さうる畔かな　松墻

秋風もつれてよ六居りも竹の巣　売屋

唐崎で雲まりよ雨ぞ欲かな　静然

咲くものは花の入しぬ初緑　風郎

坂の雅りの雨よ秋さて中えかれ　古風

声やうら偲ぶのよなき寄声　蘭坡

果しなや木標よ通ふ螢の光　甘古

朝風の冴るよこゝろみ月夜かな　用語 宗雪
海棠や梅のおもしろき樽の光　紫峰 梅志
下駄履て足の汚れも好む水　方井
記念として梅なり桜の実　紀州 倍之
出雲て梅の梅咲や来の市　六素
咲除の小松来し残る常里　有雨
蓮茸や露きて梅咲けし　寸長
茎そらく松のうへや梅の影　紫洞
香う六海の志きゝや初露　来堂
帰あけて見るめ妻子居二日ヶ孫　天草 読定
気の出る時あり天の川　長崎 文言
梅ひきつゝ水し吉き月の梅　一化

初出や冬まで覚める晴ゝなり　紀州 十年
歌しての昼の寒さや梅の月　喜来
掃く前ふ撰りしあるや三ヶ日　秋湖
櫨ろ竹ハさや遊ぶ笑う袖のうち　日向 双鳥
なる程と居る便り柳に若り　駿岳
文月や手折き水ようつる　肥後 鉄翁
二三本落葉松の庭木の形　馬翁
春ゝ紛よ影のうつる端山かれ　白英
落ちの世小柱の草身し西月　紀州 蓼汀
草よ色のこゝて思ひ出す庭　仕外
気ふの笑ふて居るや雲の山　影水
花ゝをくらく枝の梅の蕾かな　桃蹊

雪解のしるしは流ぬ氷の水かな　岳南
毛虫這ふ影ゆらぐ月夜哉　東上
衲衣濯ぐ兵の手清水かな　栩栽
息をつくもうき桜のちるや哉　大坂　嵩竹
秋風や三浦三崎の沙かぶり　不月　蘭渓
此頃の雨や火串の消終り　若狭　岩月
雪近け八重咲も残しもはの花　越前　布埆
水鶏や聲のもまたく隣家に鶴　加賀　枕壹
人の家よ家もとて梅見かな　大夢
蕗のたう流されるや雪解水　經手
梅の香は遠く戻れる世をとまり置　越中　生芽
多くは桜よりもあゝ枇杷の花　梅呂
陰り晴りまるや芭蕉の数々　翁　笑水
限りあきゆなの戸出て人七日　萩六
有る雪さるよれて旅しのかれけり　羽渓
白水しく蚊のふこの汁そへて庵木哉　越中　照竹
投ちそへる加減にあれし流漂水　蛍里
秋打つや桜の戸へ末山のこの汁　竹人
近寄せは枝ふる葉で莚の白ひられ　梅人
涼水や藻の花流てあふ飛り　越後　乙良
黄花は葉も落もて葉の花　緑成
咲くくる種そよる水や波の花　蓑池
藻の花を志ててある里川水　錦照
うつ蝶よりあやも梅の斯し光　眉晴

萩ならで志の〻上野の雨中より　習静
蝶〻の胸見えゆる柿かな　有岳
百合の香や池吹風に流れ寄る　自然
春雨や雨にふりつまれ淋しき戯る　清喜
海棠やさし入月にちる花　雅兆
宵さりに加へてこの日暮の桜かな　無丸
若葉さへ花の落でも拾われ　夕照
雨の夜は杉によしむ也青あられ　鳴楓
その色の古巣に匂ふ木の芽かな　市猿
摘み取の菜にも一筋や朝の露　加吉
見るもきぬ秋の野ろく暮れたり　雲渓
絹布になふ鮮られる柳このあと　遙室

いろあをきもの苔あらはれて藤の臺　樵史
流るゝ雲に顔あらはぬ月うつれ　残菊
蓬扇まゝかりそ頬杖に門茶かな　絵水
宇端よ一すゝ見えるや月の雪　里英
有る顔向けて嫁たつし坂ねかな　一瓢
名もしらぬるもの中の花なれ神の露　北魚
根をもたぬ萍の雨や所々　文貞
かすみ嫁の明やまほど雑子の声　志扇
紙魚むしる風をもて巡る螢かな　文常
親の家なりける花見清水ちれ　李郎
むらしの影捺ためて窓の梅　古棠
子を見て居る雀の八重ぬ藪枝かな　蕉茶

仏にも備りし世を忘れけり　麦川
打汐に月のあはれを晴らすかな　心岸
廣沢の蘭井に影ぞ松の月　淡六
人ゝ来てめでしのこるや花の妻　素明
鶯のそのあらしや春の雪の雪　亞貝
赤蛙も来縁影やとかゝり霞　花僊
潤ひめし物見しき流されて　花庵
芦の葉は秋風にすゝむ葉かな　業山
蝶々の里よりこの余寒哉　佐渡 霰舟
またさつ影に短し鶉　杏水
鶯の影の宿くらうつるや木まれ　梅雪
夕鯖や帝に拘くさしくし　茂堂

明方のや峯にかゝりしの杜鵑　志文
秋風や籾に来る庵の松　左山
初しぐれの雨に白し木の男哉　月渓
出の家のかゝるを梅に留りけり　西鳩
手の跡くゝ丈るは何ける蛙跡　呉雪
春雨に餅を鮎をつゝやまし鳥　紀伊 深松
若葉たる中やたゝしの不知恩院　伊勢 雲石
藤のまゝ紫にも綿る餘寒かな　伊勢 雀史
木の芽や芽にむ影の宿かけり　五鈴
奥口に出しさうの小残る家かな　梅亭
蛍の光は壊りに嵐の光りしの夜　尾張 而后
中々淀の雫ちらす影菖蒲　破雨

鵜舟さへ明けて岩端なる露この水　一清
神垣や萩の露しく漆なり　石邑
笠の上にも花や只ならぬ手のうる葉　玄至
松の声しきりに止めて立や菊の畔　錦水
橋ためて松緑の松のたち竹くの乱　静寿
菜園にあき来て花し菊の花　春松
鴨つれて寄る鶏頭の若鴨なれ　言蓮守
鵜飼の舟も底かや山の水　松湖
馬士の上りて菊の花の乱れ　曲古
菊これる柱に花や秋の風　斜遊
池よりも咲く菊や有明の梅　竹布
方丈も中よりて餘花も　几羅

おやめは町の見る花ある石の水　飛雪
秋の夜や花を種の稲の芒哉　土由
二三日は又れ初荷かり届け秋　吹角
松の露乱て引つよ志ろき成り　呑山
楠樹よ菊の花く涅槃の水　秋芽
十六夜の空や篝火く池のしら　完伍
一葉提て見上る桐の梢の水　嵐牛
萩の實の花く乃る菊この乱れ　杜水
明けて枝や下の虫の墓の露　底由
松柏の色より小春の名残の乱れ　波寿
稲妻も風にある空の夜なり哉　董紅
石山も空の梅もよし　飛董　砺山

夜の雨五重の塔のきえん間もなれけり　東逸
いさゝか暮ふ菊の花をなれし露の壷　如永
梅若くや紫よりかゝる翁津し　蕪逸
竹の子や柳を染めし春のかり雪　吏竹
月よ見て珠り中翁て梅の葉　乙巳
斎知なりてう如まつ出永うれ　兵賀
いらぬ竹のとりてあしや夜雪き　美濃 山士
出さくの宵らしり涼し床の月　竜逸
かけ鴫て沼の藤さすの花菜咲く　尤駿 寿雄
まさるにうれ仕売せて思ひて　信濃 阿祥
出の見て中氷とて月の家中て　天阿
白を見きて葉るとも雪のいまうれ　葛古

船の子のあとなの名ゝき若うれ　嬉雨
ゆきまたの空にかゝ鳴る蕪菁哉　野遊
静さや家七夕はあすの川　月外
坂の根も消て出しき夕かな　荘茂
梅の花る山のこさし床の月　芦川
若葉ふあり分けして梅の花　李鳥
ゆくふゐの地の花あらぬ石の山　崇
雪晴や海士の小家の夕けふり　鳥扇
つまめまの鴫あ出る船かな　梅丘
桜ありさくのうや菊の花　西梅
若返る夏の米の月　龍湘
海ね房よ頃光るゆる干潟うれ　雪庭

庭の面や冬のきらん間はなれけり　東遊

心当ふ留守ふあられて露の玉　如流

梅咲くや紫にかける紙津し　蕪逸

竹の子や杉のめ出るさくりかな　雲竹

月よみて引かけて梅の葉　乙巳

鶯初音して如まつ出来られ　再賀

いろめ竹のふりてあや夜嵐　羽陰 山士

出てものかすらしらり涼し庭の月　充逸

かけ渡す網の錦さすがの花　駿河 嘉雄

まきれても人仕立せて見えけり　信濃 延祥

出見えても水ても月の宮中かな　天浪

白を見ても苦て雪の口にられ　葛古

朝のあかなの花も落されけれ　嫦雨

いやき露径のきざかゆる芙蓉かな　歌遊

静さや名ものあまの川　月外

坂の根に消て出しきり夕かな　荘箴

様の空る山のさ夢し庭の月　芦川

芹葉ふるはけして梅の花　李鳥

いつよりの坂の花あらぬ石二つ山　崇

雪晴や海士の小家の夕けふり　烏扇

つまめきの鷺おちて出る影かな　梅丘

桜ある咲の山や藪の花　南栖

呉越る家出てあし名の月　龍湘

海松房に頃夫のゆる干潟られ　雲庭

水音く影さしけりや稲田姫　杉廓
ちる緑ゟ根に焚へて花の蕗哉　ぬ糕
あふみ路ハ月ハ高麗に啼かれ　彦露
朝くの木の芽にあまる雫かな　山外
探先や手よりもされて菫　連外
ひらひらと影にかゝりぬ梅の月　竹子
忠の音形夜に聞えたれてかへる里　梳然
霞ハ深山ぬ夢をみるのゝ高嶺かな　梳友
竹原に入ても出ぬ花かな　蒼坡
手向ける若菜ハ蓮し梅の月　葉橘
漕付る子供ちかうや早苗船　武及
鳴月や楓に鋭き宿の雨　ゐ良

峰わけ日はつもりぬ雲の山　承暁
雨まつかりわきまへて鳴田かな　圭布
竹の子移霧抜き出て伴かな　甲斐 竹庵
松立て見ゆ色して花見かな　不盡
家桜のみとに松方の小春かな　六符
見るからに月ひとり雲かな　貴扇
飛ならの浮きてかゝるきすかな　升一
蕣やうつりけるあさの露のまゝみ　竹良
鳴中にも蛙を漏らて立桃の梢かな　駿河 月桶
うちわびの笑ふにうち柳かな　伊豆 士敬
窓の中に寒くへ柳の小枝かな　武蔵 丹雲
水仙の花経やこの音にして　桜堂

水落て影さへ見えぬや稲田　杉廓

さまで続けて焚へてかる落葉かな　め糕

あらしにも月は高麗野分かれ　彦翁

朝くの木の芽にあまる雫かな　山外

探先や手よりもこぼれて飛蛍　連竹

心から出て影にかゝりぬ梅の月　竹子

春の夜は鈍夜とふかれてあらわり里　桃谷

雲は埒ぬ夢と見えつゝ旅寝哉　桜友

竹原に入て家居出ぬ夜かな　嘉坡

子等出て笑ふは連し梅の月　嵐楓

漕付て結ちつゝや早苗取　武及

明月や楓に残る昼の雨　可良

降ながら呑つくの有ぬ雪の山　来暁

雨まつる和歌のまつの咲田かな　圭邨

竹の子に露振きこて伸なるく　甲斐 竹翁

振立ても鳥しての光見かな　石道

家は椛のあしふ振方の小春かれ　可鶴

見るはちるて組鉢る咲けり　光翁

飛ほりの浮さるかなき埴けれ　升一

蓋やや雪ちるかなの葉このまゝみ　竹良

明月のまさ蛙の満て立振梅　猿 月梅

うきおもひの笑に杉る振りかれ　伊豆 士致

雲の中来て度く柳の小枝哉　相模 丹雪

水仙の葉組申さし安きもし　枝堂

嵐のうち人のみかぬや秋の山　呉丁

うつろはぬものゝ凄し秋の露　立宇

夕暮や出風に薄しをれし　菜舟

蚊遣り草刈る手に蝶もされけり　布武

咲かぬ時に見ゆる月見かな　白扇

野をのぞく木に秋の野梅られ　民家

夜山や出るこの汁しれる小山作　旭松

あを原に菊かる飯こと菊かな　郁里

稲むらや風に九月の名残られ　松盟

古き池に水そゝぐ秋の色　水石

倦みて中山を草畑ある田打水　蕙然

打よせて堀はこのしまし蛛をかゝり　萎房棲山

初秋や尾花むらのさめあらん　季民

唄の先き不二のなかれぬ空かな　梅寄

一筋は蝶よつくや夜木立　上総 由儀

寺に見えて只見ゆる海士の二あらり　寄思

津の合は何所の二ちんそこのあり　梅雪

里に竹の見ゆる夜推る手本作　梅秋

飛石に濡て涼しあはれ萩　定雅

一畝に松し田鳥や梅の花　松渥

枝木よ鳴つみのあかる雲鳥られ　来篤

静かなる夜を妙るあく嫁られ　下総 霧雪

近つきの角力勝ちし様り　蒔　月粋

二三日や竹のけりめぐる芦花　旭翁

あゝなあて去りし〳〵秋の暮さ哉　庭芝
露ほどの浮世も捨ぬ袋小袖　常陸 李石
足跡もなつかしや菊のある限り　陸奥 松よめ
向ふ見て来ては萩かゝり梅つくき　清民
株山の木立の隙の月涼しかれ　無角
艸の戸や露の夜すがらふ一夜郎　雲山
六月や露にふる夏の名残夕へ　壮山
秋雨の音も淋しく入る月かれ　静吏
菊の香や忙しのはなの海苔の味　文趣
松の葉も寒くなれは今ぞし　之ケ日　下室
暮しの月の水や来る寒き寝覚哉　乙丸
暮雨や夜寒の手枕肱まくら　芳舟

まくらまの顔うけ寄り添の菊　露白
蜻蛉とぶや秋しも一枝二枝哉　陸丸
嫗姥中よき門の柳かれ　幸女
積上る俵のまつし稲明り　ぬ山
松の声や隣もその今まつへ　千丸
雲きれや秋近き山雀の声　霧渤
夕暇の雲うつろふや葉の上　聲捨
汲つる桶さし寒きこの朝　麦秀
雪あらしやまより夜ゞ夕ぐれ哉　英泉
松のあるもあまる紅葉や滝の上　風一
名も有るは寒き夜は涼し夜の月　菱庵
九山は夕やの錦　九月かな　匠人

六月や樗ふきのこゝろ夕あらし　風志
岩鼻や清水にこゝる本の雲　雲鹿
戦のせきも見えけり坪の植こみ　輕舟
牛居の前あり八ツ手ぬ枯芭蕉　桂峨
雑草くも栂子も露る成りけり　精鶯
青柳の真すくに流し庵の内　于鳥
名月の雲に掛ふ太鼓かな　芳風
古寺の萱葺出けり柳の花　楽只
分別ハ緑して折りぬ女郎花　亂昭
破風に出あり花の水柱かな　作吏
秋風のうしろ静かし雲の山　桜依
庭の露の落けり草戸の花　少石

出る度に出るらちもすみる稗若水　菱水
濡らしき朽の花のこる露けれ　光門
結見むの嬢けるゆき手織かな　梅月
添ふのほもあく山茶花のちる冬　梅峰
冬の月ものくにけり雪の梅林　大素
近くれハ御の中けり梅のかな　寿堂
蔵りてもすき花の津き柳かな　之求
春の花や只一枝よすゝめ花さき　六槐
根も揺り揺り枯よ世渡し茶立虫　遊阿
四辻の幣もなりけるの風　紅之
日のさして陰の初花見け平かり　緑柳
女木の葉の色に茶蓼葉かな　左水

朝顔や咲きそめし日の凋みには　加筆
月の如き中のあはれさへ末枯られ　文江
夕日に宿にも飛しちりの梢かな　心浩
稲の花埜道さきやさしき納り哉　未用
出しさに花にある夕顔られ　五雪
秋風の夜の吹く一声や秋の声　文人
きり日に顔もし荻の声　知之
山の端の月見の頃しや燕子花　樗邨
秋の風しらぬ月の清く流されたれ　眠齢
宿の垣に老し月夜の秋見かな　朱山
寒さより初めて見ゆ稲妻の夜の光かな　一止
なき人の肖像のとしや物思ひかし　舎用

秋さの出ろうは行つくろふ雨の後に松茸　猫堂
影くらき月ハあらし月の雲　雪翔
まだ雨に晴ぬ蛙の出る哉　北崖
雑子啼くや初雪ひとり山の端に　鶯舟
波に昭すつて秋の山しめかな　桂呂
出しさを見て晴る宿の雨　小濱
出ぬるにはかん筆色や香に月　良見
雲の峰見えたるのさ根路かな　時宏
風よけを揚ぬ竿や稲の花　枝雪
花遠きさそふて吹や薮の虫　三千丸
近寄て雨夜を来たる氷柱哉　洪楽
雲と紙を来て香く菫る桜かな　旭

桃さくのまくらにゆるむ雨のおと　松お 猫雪
梅ぐいの声りはあらし月の雲　雪胡
また雨になる夜ぬ蛙のなく也　北岸
雉子なくや節雲ひく山の池　鶯角
浅き暇なく秋のはしめ哉　桂呂
春しさを思ひて晴る宵の雨　小濱
春雨をもみん重ねや花の肩　左呂
雲の峰見て行くの旅路哉　時家
風にさへあらぬ針や稲の花　枝雪
花遠くなりて蝉や蔵の虫　三千丸
近り来て雨ほと〻ぎす水鶏哉　波峯
守らぬ花をもれて散る桜哉　旭

夜の帰やおもうてまた返し狗桜哉　暁風

咲まゝに散しも花の別あらし　蕉晴

花遠し又懐うき身の遅し残の梅　可亭

雨と見えてさゝ雲ゆく花見鴨　杉泉

娘等の来さうな門のこのあたり哉　沿清

身にしみて秋のつめたき錦の帝　満尊

皺よけて花の人にまぎれけり　暁友

梅の花の散るものは曲をもつ　桂儺

海もあかで見まく梅の雛かな　一弘

家中にはゆかる杏なれ梅の園　羅橋

宿もなしや松の花の杏の風　桃里

咲けるをまたたる花を麿のまへのめかな　竹二

嶋かすに落の出て居るふりもなし　素人
江淵の夕日こほるゝ梅のまはら　鶴渓
先に行鶯の音やすゝしめられ　雅艾
梅の花咲つゝ寄る初時雨　旅山
家さまや夜をしのふ月の宿かな　馬川
鶯の初音一つや縁の先　三酉
一鉢に花をや残す心のまゝに　古花
まさに此ころ出かけて更衣　芸納
梅桜花と見まかふ夜の花　清山
来る夜の鳥も知らぬ年の坂　出羽 清風
月の行道の遠さに案山子かれ　素正
あつまる雨や山桜　雲貢

衣の帰やなかなか残し羽根草　凉風
行まゝに見し花の影なし　蕙晴
見廻しても清き月の残の梅　可亭
雨さへ見えて萌え出る草の露　松泉
蛙なく床さへも門のこのもれ　沾晴
見え来る秋のつゝめ野の市　潟尊
餞せしけに花さく人のかなしさ　慶友
梅さへ咲てのは興なし　桂儁
海士の見る花さく夜の雛かれ　一弘
家中さま行る春なれ梅の月　羅称
面白さや松の花咲く春の風　梯里
春にやさしき声を聞く夢の夜かな　竹二

ちる秋や畑に人なくのり　播山
地にすまでゆるさもつくぬ柳哉　下毛 宝要
川音や雲のけしき又かわ　和堂
牛臭きさゞ鶯あくて墨むくのひ　申淙
蜻蛉のとまるあたりぬ壁細り柳の雫　蒼精
庵の戸やぬきたつ雪の影さびし　梅呂
蜻蛉の囲にかける柳の花さられ　来洋
雁うたる橋杭の高き五架哉　秋月
月入て何も淋しき霧の末　一瓢
柳にきのり鳴てあくまでの蝶　性山
鎌りあて夕日のさびや根の糸　布葉
薄氣さまに見ゆるて蟷螂哉　圃塚

名月や俵料理の青菜ぶ菜　柳塘
立居にも風つきまとふや曲り竹　魯長
菊水や千代萬代の宿上川　松眉
こゝ嬉しくは只来る雁の渡し　鶴海
菊まて秋また明きぬ楢かな　松雪
黄昏の木の葉ぬるゝ松のあらし哉　月照
二人して草苗提て問ふ名哉　川澄
松の戸へきるゝ小わた雲に仏名　二丘
秋風しら女篭持し山月哉　水竹
宿手桶置て人あきて持られ　柴崎
門松や常まて動きく立寒　月山
青嶋や西へ帰る雲の曲　宗丘

きのふ秋や碑行に人たくのり　瑛山
地まて行きるも尽の松かな　下毛　宝翠
川前や雪の竹もあきぬ女の和　知堂
半夜き鷺あらて寒むのひ　中洲
蝉のからあらぬ枝調り梅の枯　蒼精
庵の戸やぬきたつ露の影うさ哉　梅谷
蝶の田よまける松の葉さそれ　来洋
雁うたう稲梅の花き五架哉　秋月
月入て後も濡り露の雲　一龍
梅よきのり鷺にあらま雪の煙　其山
鋳りあく夕日のさはや松の気　布業
青嵐さよ居る見へるゝ蝶蔀哉　圃除

なのへてもめでたきかりうらの月　其笑
枝をるや出たつはなちる桜　桃仙
人の声しさはげしき庭の苔　上毛 竹畑
畔豆の葉の色まで細き氷野水　一朗
一夕の菊まても見ぬ茶葉かな　梨堂
咲きしむ庵や虫の声の明り　一呂
廣野ても露の風葉雲寒しきかな　のつえ
花の色てきせぬまきるかな　振山
あき見もわかぬめくし初燕　梅二
かりくの松まき風の寒庵かれ　孫右
冬の寒や花見る明まも深かく　花亜
花さへまきされる萩見の枝かれ　是人

合昼の雁ても松まし須戸の露　壺園
折くの月かきつきぬ花見かれ　旧若
梅か香や水を見よしの若月松　松五
花の香にかさし出る月松かれ　琇腓
口福の菜も中まの茶を見のひ　儀九
唐土よりおし出る春を松かれ　一柱
白きくまも花うき環あり夜の雪　生儀
花の雪まかりてまさり梶一葉　朱室
鮫鰊や月し松のきよし　心学
冬ふかきの中も松の下手見かな　桐修
春よもの山さく見えの人数かな　業之
関の人も秋も雲中まつ心かな　渕布

うしろ向おむき替るの萩かな　木公
うつくしき草のいろ〳〵露の花　竹崖
抱つきたる様めて女郎花　律甫
嘉例に咲あまりのちの萩もなし　允甫
菊にや咲の白の花の秋の露　竹之
目務ひせぬたてのうへ見えけり　而射
竹柱て池の風ちか夕なり　螳螂
引て芽のあしひかけし戸口哉　栖鳥
すのこ立邦にかゝる一葉かな　紅硯
名を問ふの声の御の無礼なり　芝鶯
声遠て見返るあり此の雲　雨考
なのせこさへ業のこの梼種かな　陵笑

はつふゆや初の夜の花遊び　文阿
出しそめの巧なる花のを手鍋かな　然衆
呼出のいはまき初る菊もかな　入彖
常ゝと作りたる竹植らんし　雲和
不二見へ声の音雪降かな　武守
勝に浴ちよあのらかしまり哉　呂粧
薬世いし汁ま桐の芽出しけれ　春吹
萩拾ふおちしぬ桜の花けたり　如儒
大空の深きのちらし天の川　芸園
走るや人の中ふる声の人　牧雉
風のやの初きしな竹かな　乃気
積おき帯もへの汁かくかきり哉　浣水

明のさめぬうちから穿(?)し花の枝　雅水

柚あらしやみをさしぬ梯子の朽紫　積一

花垣(?)をつらぬるつあまく殘菊哉　鷲翁

松ひ人の節(?)をあけてぬらし哉　鷲雌

楓ちの葉(?)に尖(?)る　葛ろ跡　除人

竹水の垣をよ落るしくる也　一桂

緑木(?)の宿のつ網る　楷木ろ形　文水

東風ふくや庵の屋(?)の水勝く　佳一

木雫(?)を書つる花をみの筆の雲　一静

石手(?)綠(?)の節(?)ふつ花(?)の餅　柱水

雪水のあくしく葉る　彼岸子れ　素球

落葉してつひふく　梢ろれ　勝帘

梯くや見けし人なき落葉哉　良斗

餅のとの白ひ向ひさる　葉むき哉　一車

岩鼻やさこのろのみ花の瀧　梯月

海客(?)ものまつもつきうれ　斗鷲

むつまさ節や向ひや百千鳥　一路

幸なるの月作しつり　慈　一東

見きらひ秋のふ秋(?)月の向ひし哉　精斎

晴にのまときみさらて　夜明られ　一鶯

みるりしき結ふあかろや　初千水　東雲

むくよ織ろ白そく思きゑ　椿　松風

宵月の常艸ふあそひ帝り　白雨

宗子(?)を椿をつりのえて　照り(?)　積佛

打水のちりてる涼しさや月の影　芭蕉
茯苓の白き木下の照射かな　兆水
手結ぶ揃ひて行く筆の水　古存
海へひとつ咲ては人の来る水　恵来
若竹の色をやるるきつ流れ水　静水
うの花の咲て旅しらず　一青
根岸や心やすの世の涼しさ　一蝶
秋の夜の只捨てぬよ夜水　鬼老
一夕て虫捨てる扇かな　稲根
蛇沼ぬ蛇ある渕瀬水　木芝
笹ひくる身のかくる銚子かな　宇瀬
月ハ入人ハ森て梅一木かな　分居
くもりの杢ハよく深し筆　心路
ひとゆくて筆のつく筆柱　下総　妙居
ちのふきの力ひく杜丹　生峰
半魚の水揚て来る入梅かな　李郎
若よきて見置るの深し筆桜　宋字
螺火や崖ひ來る筆も立　貞水
枯もめて置る宏ある梅かな　生持
赤取りよあらしろなし揚かな　英精
影ちる襟君は又一く　羽州　宏子
夕雲やあまの寒のうつの影　蕉山
ひろふふり松のめく雲性無へ　弘角
蓬きかうつりてある草の影　青好

棕櫚の皮むきつくしたる寒さ哉　素泉

門を見て[illegible]のかしましき[illegible]　某甫

七草[illegible]　芦十

火の虫[illegible]の[illegible]一葉　甚園

[illegible]のけや[illegible]の[illegible]の水　有之

露[illegible]の[illegible]　南涯

[illegible]の[illegible]　鳥岬

[illegible]の萩[illegible]　呉雪

初[illegible]　雪篇

[illegible]　清井

魚[illegible]　弘湖

梅[illegible]　芦琳

咲[illegible]の[illegible]　三洲

一[illegible]　龍[illegible]

[illegible]

[illegible]　湖堂

[illegible]　和雪

[illegible]　文山

[illegible]　体良

[illegible]の[illegible]の[illegible]　春雁

[illegible]の[illegible]月[illegible]の[illegible]の秋　湖月

[illegible]料理人　春湖

[illegible]　末英

[illegible]　梅笠

風そよや楽出し出る窓のひさし　希之
露にぬれし蝶や斗らぬ窓の萬　嵩之
野の雨や疲れて行き女郎花　外山
秋もまたまつ出る世住ぶし櫻の實　素圓
降り初めし頃や萩の雪荻かれ　酉山
消のこる雪の中より若菜哉　武正
心あらば月見しまはらぬ萬かな　五滋
大寒や夜明けてこの冬出しけり　友甫
此月の見ゆる楼の雲かかる　左昇
夕の雨ちる庭のあさがほ秋の雨　月雄
影法師見し露も梅見哉　經良
雨降る夜は猶田植かな　只水

飛石の月に塊しぐるる朝寒や　ひろ子
岸に来る衣のほころび鳴く雲　堀昇
夜寒のうちや世の事の春の雨　交英
浪人の買人の萬かな　勇賀
名月や秋の夜ごろの雲のかり　兼成
朝露のきえぬなれなき田川　薜窩
柴栖の奥も拘わるるわらじ哉　左敬
いつも秋ばかりある扇かな　向正
門松の木の月に宿る扇哉　梅水
三日月稲の見ぬ　魚笠
鶯や声もさへる梅の花　完玲
豆の月名月引きの家の夕紅葉　天虫

花咲ぬ木のしめ蔵る木の実かな　江戸 桔堂
何としてきえはうきぬる梅のさき　史哲
刈るあり枝て有りして梅の花　不染
岩の上の世の中に子まき紅葉かな　徳隣
秋なそ角ひまあきの牧ゟぬ　宗風
名月や空のところの影のちれはち　呉山
出羽芽のかく出伴て相一株　波路
星座をもてゆる志もや袖の露　尾村
蓑行やをおりかに空の露しく　徳之
宿は先姥は柳のけやもとの月　学字
松の木に深をや梅を入遠千浮　几分
秋まくし此夜は月の花きさらみ　指系
雨の風の消えおく蝶や錦かな　梅翁
来る年の秋のひつく夜ともかな　祖分
秋くる年秋のまつくふ扇かれ　学仙
鬼にまつりて住みまま二月かな　美交
山畑や明日の影にしらしくもの　白外
あきの日の夜もありて田おもかな　升斎
新芒やす菜の上に注連錺り　牧水
目明くよ向うて梅の匂ひかきまかな　菫九
牧童の追ふ手の影の手物かな　呉洙
葛の月さらや枯野の水かなり　万芳
名ふるのはかれ出て上の重小庭かな　小園
草鞋ふつ拖のさしの羽場かれ　得甚

咲きつゝのかけ渡る堀のつゝしかれ　可裁
竹の外やきつねの後の杜かり　扇立
笠ちかくつゝくと立ち数かなし　雨様
三井寺の鐘も多くて冬の夕くれ　千竹
けふ先へまゐる鹿の声を交されし　雷年
北風に追てして雉子の立ちはるかさ　山子
身の気のみ何事を遊ひて三年ゑ　きく雄
初秋の残暑すいせいて香かられ　鳥外
家ものかけ住なれし新の露　茅古
落つきし光りを月や秋の月　魯心
落葉にもさし中流水遠のけて　永舟
かりまにし出しかせり網代守　巻

けふ来の植かり吹おもて咲かし　謙六
若竹のこしめのおけ手綱さく　一茶左
朝露に幟さしのあふる火寒しかれ　一枚
枚の事や振袖の柳のおよそうし　古松
いつも帯あきまや森の堀だき　四瑞
山家まで宿の蝶の仕舞かな　雨久
ゆかりし松を常に立て仕舞ひたり　素以
まつるかせんたの梅のきのかれ　巴雲
摘にせる梅にかゝや芽の餅　雲桜
山鳩の唄や秋月の朝曇り　虹鯨
深山の谷の衝より本初秋かし　茶分
玉柳やむかしあつしのいかり　愛愛

深草の績よ下出の水鶏かな　五体
咲ころ見て淋しの花さく塚かな　乙雄
何となく霜むつ川の初しくれ　主宮　月蛍
手ぬくひの小あら摘む垣の芽かな　勝蔵
見るうちに消る氷あり梅の花　海江
樹の芽潜り出そ六かしれなり　瑶蕣
ちる花よりゆめのつりや唐紙の堀　一蝶
行先の出来て春ありき春の水　竜遊
人ならは枯野よ心寒からし　呂汶
山水の流る毛竹の根かんかな　平民
深田へりや水の中出て春の草　芳露
合歓の木新るる風に垣よかな　春梯

霧の戸にまりてすやさらす杉魚かな　杢兆
行人のくづれ足音うかれけり　杉不
秋くのさいふめりくの風や梅の花　糸一
蝶の来て錦をうつるや春の風　芳所
八九分見て咲る花の林の花かな　華芝
鳩の声錦めきてゐふや春の雨　鮭住
鶯きくや月の梅から清る村　五荘
出てしき水の手きや秋時雨　田読
新まて秋八ちしる蝿の夜　華二
家も世人も油引のある目れ　如山
町屋ののづくり落る木槿かれ　風葉
何も知らなき雲のふりかな　鶴声

戻りても夜寒しきの汀るかな　咲米
雪ちれて枯柳のはめの一つかれ　春迎
中々にきぬたに稍火の紐ちかな　柴路女
ゆふちりに雨の押入て萩の声　一海
菜の多も雪までのこし柳かれ　蓬鳴
惜しまれ芥子にも風の吹き木かな　本修
白いの鳴る雲も古びし門のかな　友松
芦の葉は雲に森雲に風の音　堂林
剣は人に流さぬきりかな　桃人
お園の冬も緑に古代の春　南池
ひとつ出て蓄し蕾かれ　波古
暮しやひとつの河るる　久女

行かゝりに遠の行る元方かれ　芝女
堀川の志たふく春の夕かな　以水
新の山ふとし笑て梅の花多り　正甫
立のかるらに秋行り雲の峰　梅子
夕やけ月やなくの声蕎麦の葉の雲　鳴水
過水の汁ほど肉のおもみかな　一壺
夜一さん霞むから若菜かれ　如泉
寒樹焼とみしに占むさる大橘かな　楚澗
橘あとてうし秋あきく萩かれ　弘湖
若きるのちりにもみぢ南蛮かな　梅姫
蛤手ふまし花や林檎の夕しく里　六窓

うきしづみ浮やつ出し月の鴨　浪女

手を折ば菊の香満しるしかな　均舟

時雨かや傾きぬ月の雨　白英

常盤木は紅葉ハ粉くる光かな　之寺城

木の葉ちる落ても出ぬ夜れかな　洋梅女

某家の未亡人高雅の遠忌を追悼
浄精会に営みて解おもぬつまで

其ちゝや茂に逢へ鐘　西馬

安政丙辰の冬十月上旬二拾の日
五十回忌を営みて修し侍りて

会者定離たすに集の別れかな　今